

鹿児島大学大学院理工学研究科
附属 DX コネクトセンター

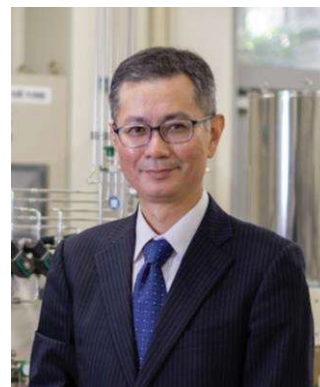
令和7年度 事業実施報告書

目 次

1	センター長挨拶	1
1.1	DXコネクトセンター組織	2
1.2	DXコネクトセンター構成員	3
2	事業報告	4
2.1	事務局管轄	4
(1)	主催事業 DXコネクトセンターシンポジウム2025	4
2.2	人材育成部門	6
(1)	数理・データサイエンス・AI教育グループ	6
(2)	DX教育推進グループ	7
(3)	グローバル人材育成グループ	11
(4)	インターンシップ支援グループ	22
2.3	先端研究・地域連携部門	25
(1)	DXコネクトセンター所管研究会一覧	25
(2)	DXコネクトセンター所管研究会活動報告	27
(3)	SDGs推進事業（海×島SDGs推進プロジェクト）	35
(4)	コトづくり支援ラボ（活動報告）	39
2.4	DXタスクフォース	41
(1)	半導体人材育成タスクフォース（半導体人材育成理工学センターの活動）	41
2.5	DXコネクトセンター協議会	43
2.6	産学官連携事業	44
(1)	令和7年度鹿児島大学シンポジウム	44
(2)	他組織との連携	49
(3)	地方自治体との包括連携協定	50
3	会議報告	51
3.1	運営会議	51
3.2	部門会議	52
(1)	人材育成部門会議	52
(2)	先端研究・地域連携部門会議	52
3.3	事務局定例会議	52
3.4	コトづくり支援ラボ会議	53

1 センター長挨拶

2024年11月、鹿児島大学大学院理工学研究科附属 DXコネクトセンター（以下、本センター）が設置されました。本センターは、理学専攻・工学専攻からなる理工学研究科を、理学・工学・情報科学の三専攻から構成される新理工学研究科へ改組するにあたり、新たなミッションのもと活動を開始しました。その主な目的は、高度情報専門人材の育成強化と地域貢献に関わる研究推進です。地域情報教育・人材育成の強化、地域ニーズを踏まえた教材・科目の開発、学内外組織や地域企業との連携、情報人材輩出のための人材教育の地域循環拠点形成などを進めていきます。



これまで理工学研究科には、2014年に設置された地域コトづくりセンターとグローバル人材育成支援室があり、約10年間にわたり多くの実績を残してきました。両組織は本センター設置に伴い廃止されましたが、人材や培ったノウハウなどの資産は本センターに継承され、今後の推進力となっています。旧地域コトづくりセンターは「先端研究・地域連携部門」として再編され、地域におけるDX情報の共有や産学共同研究の推進などを行います。旧グローバル人材育成支援室は「人材育成部門」となり、DX技術に関する分析や教材・教育カリキュラムの開発、国内外研究インターンシップの実施を担います。また、喫緊の課題に迅速に対応する特別編成チームとして「DXタスクフォース」も必要に応じて設置し、本センター設立当初より活動していた「半導体タスクフォース」は、2025年7月1日より「半導体人材育成理工学センター」へと発展し、現在も幅広い活動を展開しています。

さらに、本センター内には「DXコネクトセンター協議会」を設け、鹿児島に関係する企業9社、鹿児島県・鹿児島市、地元高等教育機関3機関、学内関連2組織が参画しています。加えて、クロスポイントメント協定機関（1大学・3企業）と連携し、実践的なDX教育を展開しています。本センターは今後も高度情報専門人材育成と地域連携の拠点として、地域社会の発展と持続的成長に貢献してまいります。皆様の変わらぬご支援とご協力をお願い申し上げます。

鹿児島大学大学院理工学研究科
附属DXコネクトセンター センター長 小山佳一
理学専攻 物理・宇宙プログラム教授

1.1 DXコネクトセンター組織

本センターは、高度情報専門人材の育成を教育研究の両面から支援するとともに、社会的・職業的自立に必要な能力およびアントレナシップを培うための実践的な教育の場を提供すること、ならびに地域における情報教育および人材育成の中核的プラットフォームとなることを目的として設置されている。

これらの目的を達成するため、本センター内に「人材育成部門」および「先端研究・地域連携部門」を設置し、各部門の下にグループ、領域等を配置するとともに、センター全体の運営を担う事務局を置いている。

また、デジタルトランスフォーメーション（DX）を取り巻く環境の急速な変化など、喫緊の課題に迅速かつ柔軟に対応するため、DXタスクフォースは、必要に応じて設置する特別編成チームとして位置付けられており、部門横断的な連携のもとで機動的な活動を行う体制を整えている。

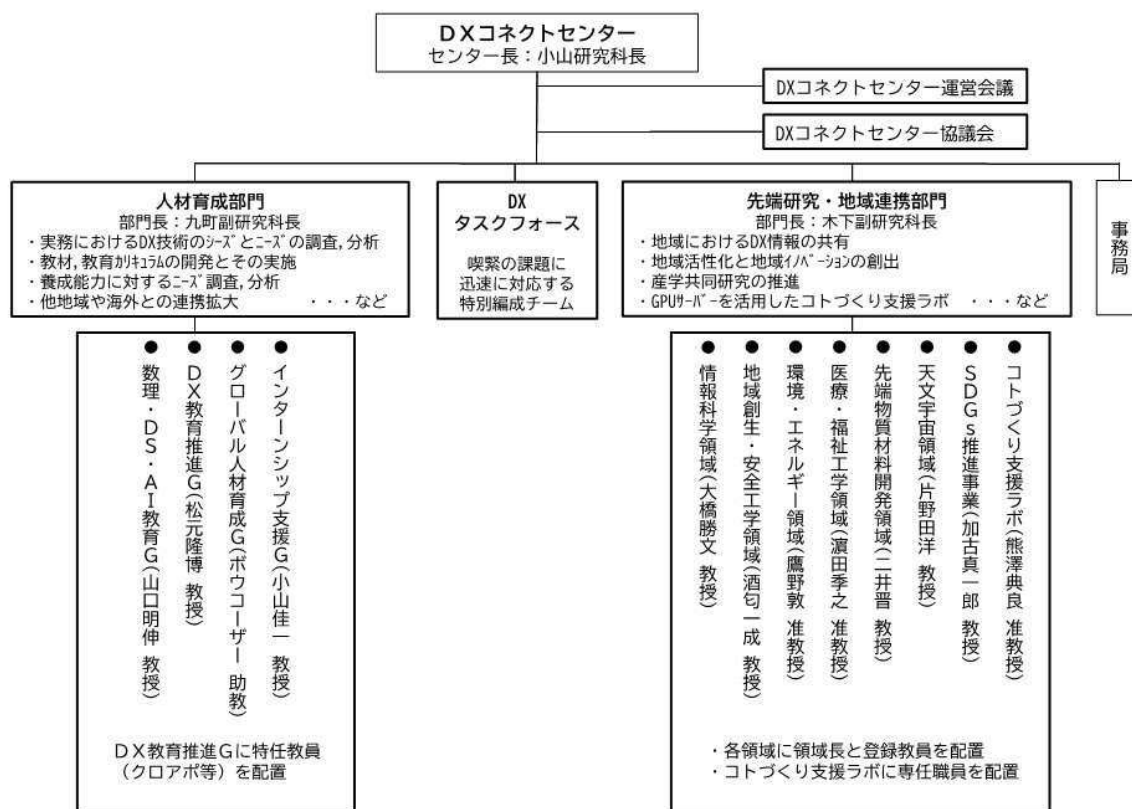


図 1. DXコネクトセンター組織図

1.2 鹿児島大学大学院理工学研究科附属DXコネクトセンター構成員

(1) DXコネクトセンター構成員

センター長	小山 佳一	物理・宇宙プログラム 教授 (理)
人材育成部門長	九町 健一	生物学プログラム 教授 (理)
先端研究・地域連携部門長	木下 英二	機械工学プログラム 教授 (工)
研究科長特命補佐	山口 明伸	海洋土木工学プログラム 教授 (工)

人材育成部門 (グループ長)		
数理・DS・AI 教育グループ	山口 明伸	海洋土木工学プログラム 教授 (工)
DX教育推進グループ	松元 隆博	情報科学プログラム 教授 (工)
グローバル人材育成グループ	ボウ コーザー	建築学プログラム 助教 (工)
インターンシップ支援グループ	小山 佳一	物理・宇宙プログラム 教授 (理)

先端研究・地域連携部門 (領域長および各代表者)		
情報科学領域	大橋 勝文	情報科学プログラム 教授 (工)
地域創生・安全工学領域	酒匂 一成	海洋土木工学プログラム 教授 (工)
環境・エネルギー領域	鷹野 敦	建築学プログラム 准教授 (工)
医療・福祉工学領域	濱田 季之	化学プログラム 准教授 (理)
先端物質材料開発領域	二井 晋	化学工学プログラム 教授 (工)
天文学宇宙領域	片野田 洋	機械工学プログラム 教授 (工)
SDGs 推進事業	加古 真一郎	海洋土木工学プログラム 教授 (工)
コトづくり支援ラボ	熊澤 典良	機械工学プログラム 准教授 (工)

DXコネクトセンター事務局		
人材育成部門担当	川邊 和歌子	DXコネクトセンター 特任専門員
DXタスクフォース担当	永重 一博	DXコネクトセンター 特任専門員
先端研究・地域連携部門担当	宮内 絵美	DXコネクトセンター 特任専門員
事務担当	白瀬 琴美	DXコネクトセンター 事務補佐員

※理工学研究科理学系の教員は(理)、理工学研究科工学系の教員は(工)と記す。

※上記は、担当プログラムを掲載している。

(2) DXコネクトセンター協力教員

令和7年度の本センター協力教員は、理工学研究科および共通教育センターの教員129名である。

2 事業報告

2.1 事務局管轄

(1) 主催事業

理工学研究科DXコネクセンターシンポジウム2025

「鹿児島と日本の未来を担う高度情報専門人材育成」

— 理工学研究科の地域連携とこれからの挑戦 —

【開催日】 令和8年2月10日（火）13時00分～17時00分

【場 所】 鹿児島大学稲盛会館キミ&ケサメモリアル
ホール（オンライン同時配信）

【参加者】 全体参加者191名

（対面146名、オンライン45名）

※県内高校生87名の参加を含む

【主 催】 理工学研究科DXコネクセンター

【後 援】 鹿児島県、鹿児島県教育委員会、鹿児島市

【協 賛】 株式会社トヨタ車体研究所、GMOペパゴ株式会社、株式会社マルマエ、

株式会社鹿児島銀行、株式会社リリー、リコーITソリューションズ株式会社

本学理工学研究科では、情報科学分野の教員による教育・研究を通じて、地域社会における情報技術の活用と高度情報専門人材育成を推進することを目的として、本センター主催のシンポジウムを開催しました。当日は宮本篤企画・社会連携担当理事の開会挨拶により始まりました。

講演は、本センター先端研究・地域連携部門長の木下英二教授による司会進行で行われ、高度情報専門人材育成のために着任された4名の理工学研究科特任教員よりそれぞれの専門分野に基づく話題提供が行われました。まず、特任教授 勝眞一郎先生より「生成AI時代のプロジェクトマネジメント」と題して、生成AI時代に求められるプロジェクトマネジメント人材の育成や大学教育における生成AI活用について具体例を交えてご紹介いただきました。続いて、特任教授 屋附秀司先生より「情報科学実践演習における取組みと課題」と題して、実践演習の具体的な内容および演習後アンケート結果に基づく今後の課題についてご説明いただきました。



左から）勝先生ご講演、学生との質疑応答、屋附先生ご講演の様子

さらに、特任准教授 加葉田雄太郎先生より、「かたちと特徴の幾何学」と題して、「いろいろなぐにゃぐにゃ」を数学的に研究する視点をご紹介いただきました。日常にある曲線の例をも

とに、それらが満たす規則性について解説され、線形代数や微分積分を用いて形状を数学的に表現できることが示されました。さらに続いて、特任助教 桃木光輝先生より、「数理情報科学プログラムにおける統計科学教育・研究について」と題し、具体的な事例を用いて教育内容を紹介するとともに、統計的手法の開発における数学的アプローチや研究上の課題についてご説明いただきました。

パネルディスカッションでは、本センターDX教育推進グループ長の松元隆博教授をモデレーターに、4名の講演者をパネリストとして迎え、「生成AI時代の情報教育」をテーマに討議が行われました。今後の生成AI時代の情報教育をどのようにしていくのか、高校生や教育現場の参加者から寄せられた質疑に対し本学教員が専門的な観点から意見を共有し、生成AI時代における課題と今後の情報教育の展望について活発な議論が展開されました。

閉会にあたり、本学理工学研究科長である小山佳一センター長より、本シンポジウムを通じて、多くの参加者とともに高度情報専門人材育成に関する課題や今後の取り組みについて多様な視点を共有できたことへの謝辞が述べられ、今回の成果が今後の活動の推進に寄与するとの挨拶がありました。



左から) 加葉田先生ご講演、桃木先生ご講演、パネルディスカッションの様子

このほか、同会場ではポスターブース展示を実施しました。ポスターブースでは、本学情報科学プログラム所属研究室による研究紹介に加え、本シンポジウムへご協賛いただいたセンター協議会企業および高校生による研究発表ポスターを展示しました。

また、休憩時間には協賛企業のCM上映やテロップ配信を行い、県内企業の紹介を行うなど、新たな試みも実施しました。これらの企画により、企業の皆さまにとっても自社の技術・活動を効果的に発信できる貴重な機会となり、来場者からも高い関心が寄せられました。



ポスターブース展示の様子

◆高大接続特別授業を実施◆

本シンポジウム開始前に、高校生に向けて工学部広報委員長の青野教授による工学部説明会と



左から) 青野教授の説明会、小山教授の講義の様子

理工学研究科長の小山教授による理学部説明会および物理学を基にクレーンゲームを攻略する講義を実施しました。今回は本学理工学研究科と協定を結んでいる鹿児島実業高等学校の生徒を対象として実施しました。

2.2 人材育成部門

(1) 数理・データサイエンス・AI教育グループ

本グループは、文部科学省主導で設置された「数理・データサイエンス・AI教育強化拠点コンソーシアム」と連携した活動を実施している。今年度は、コンソーシアムの特定分野会議（自然科学系）および九州・沖縄ブロック会議における活動を通じて、新モデルシラバスや高校の情報必修化への対応を検討している。主な実施内容としては、標準教材とグループ独自に作成した教材の、専門分野別およびレベル別の具体的な活用方法を構築・公開、工学部2～4年生を対象とした能動学習型教材、TA、およびAI教育用GPUサーバー等を活用した授業などがある。さらに、工学系分野における学協会イベントや、DXコネクセントセンターと連携したシンポジウムなど、様々な機会を設けて、他部局・他機関への情報提供と、教材の活用を推進している。具体的な活動成果は以下の通りである。

① 能動学習型教材の作成

グループ独自に65件の能動学習型教材を作成・公開した。内訳は以下の通り。

- ・プログラミング：41件（C言語12 Fortran15 Python14）
- ・基礎統計学：15件
- ・セキュリティ：4件
- ・人工知能：5件

② 能動学習型授業の実施

能動学習型教材とティーチングアシスタント（大学院生）を活用した能動学習型授業を実施した。受講者の内訳は以下の通り。

- ・数理・データサイエンス基礎：448名
- ・建築の数理・情報：62名
- ・プログラミング演習：500名

③ 他部局、他教育機関への教材の提供と活用推進

学会等のイベントでの広報活動（10件）に加え、鹿児島工業高等専門学校、第一工科大学や、鹿児島工業高校、鹿児島実業高校等の県内教育機関に情報提供し、HPを通じて教材を提供している。利用者アンケート（学内を含む）による提供・利用の状況は以下の通り。

- ・回答者：教員7件、学生5件、一般1件
- ・利用目的：自身の学習5件、教育での使用8件

(2) DX教育推進グループ

本グループは、地域産業のDX（デジタルトランスフォーメーション）化やグローバル化を推進する人材を養成するための活動を行っている。具体的には、情報系分野で活躍する現役のエキスパートをクロスアポイントメント制度により特任教員として採用し、社会現場に必要な能力や知識、技術などの学生への教育や、地域課題を踏まえたPBL（課題解決型学習）などの教材やカリキュラムの共同開発、異分野融合のDX教育の実施を進めている。今年度は、クロスアポイントメント教員として下記の5名の特任教員を採用し、講義及び演習を実施した。

- ・勝眞一郎 特任教授（2025年4月1日付採用）
- ・屋附秀司 特任教授（2025年4月1日付採用）
- ・黒田翔 特任准教授（2025年4月1日付採用）
- ・古市浩隆 特任講師（2025年4月1日付採用）
- ・久富あすか 特任講師（2025年12月1日付採用）

まず、円滑に講義や演習を実施するために複数の会議を開催した。今年度開催した主な会議は以下の通りである。

2-1-1) 情報科学専攻特任教員の担当科目に関する打合せ

日時：2025年3月24日（月）18時30分～20時

場所：Teams（オンライン）

参加者：

- ・勝眞一郎 特任教授、屋附秀司 特任教授、黒田翔 特任准教授、古市浩隆 特任講師（クロスアポイントメント教員）
- ・大橋勝文 教授（2024年度プログラム長）、王鋼 教授（2025年度プログラム長）、小野智司 教授、重井徳貴 教授、松元隆博 教授、福元伸也 准教授（2024年度教務委員）、西村方孝 准教授（2025年度教務委員）、岡村純也 准教授（2025年度副教務委員）（情報科学プログラム）

内容： クロスアポイントメント教員室の確認、担当科目とその内容の確認と調整など。

2-1-2) 実験室内利用可能設備の確認と打合せ

日時：2025年4月17日（木） 10:30-11:30

場所：コトづくり支援棟2階情報・生体工学第1実験室

参加者：

- ・古市浩隆 特任講師（クロスアポイントメント教員）
- ・松元明子 技術専門職員、西正満 技術職員（技術室）

内容：下見（使用可能機器、音響、空調、施錠）

2-1-3) 電算機演習室内パソコン環境の確認と打合せ

日時：2025年5月16日（木） 9:15-10:15

場所：情報・生体工学棟2階電算機演習室

参加者：

- ・屋附秀司 特任教授（クロスアポイントメント教員）

- ・重井徳貴 教授（情報科学プログラム）

内容：情報科学実践演習Iで使用する電算機演習室内パソコン環境の確認

2-1-4) IPA未踏募集に関する打合せ

日時：2025年6月25日（水） 17:50-18:10

場所：共通棟特任教員室

参加者：

- ・勝眞一郎 特任教授（クロスアポイントメント教員）
- ・重井徳貴 教授（情報科学プログラム）

内容：IPAの未踏の地域版AKATSUKIが今年度から鹿児島でもスタートし、応募者を募集していることの情報共有とその院生の応募を促すための打合せ

<https://mitou-ishin.com/>

2-1-5) 情報科学専攻特任教員の対面顔合わせと情報交流

日時：2025年11月20日（木） 12:00-14:00

場所：共通棟特任教員室

参加者：

- ・勝眞一郎 特任教授、屋附秀司 特任教授、黒田翔 特任准教授、古市浩隆 特任講師（クロスアポイントメント教員）
- ・重井徳貴 教授、松元隆博 教授（情報科学プログラム）

内容：対面での顔合わせと科目内容についての情報交換

クロスアポイントメント教員は主に3科目を分担して講義を実施した。各科目とその担当コマ数は下記の通りである。なお、

2-2-1) 情報科学実践演習I：プログラム必修、M1通年、各教員集中（基本、水4限目、5限目）

勝眞一郎 特任教授 5コマ

- ・情報技術を活用したプロジェクトマネジメントの実践力向上

屋附秀司 特任教授 5コマ

- ・ニューラルネットの言語モデルの学習

黒田翔 特任准教授 5コマ

- ・WindowsPCとPython言語を用いたAIモデルの学習

古市浩隆 特任講師 5コマ

- ・マイコンとセンサを用いた測定システム構築による製品開発の演習

2-2-2) 情報システム工学特論：協創情報コース選択必修、M1後期、木3コマ目

勝眞一郎 特任教授 3コマ

第1回 情報システムの企画、設計、運用

第2回 企業における情報セキュリティ

第3回 DXと情報システム戦略

屋附秀司 特任教授 4コマ

第1回 情報システムの構成要素

第2回 情報システムとしてのWebシステム

第3回 オンプレからクラウドへ

第4回 Webシステムの実践例と課題

黒田翔 特任准教授 4コマ

第1回：システム設計の基礎と要件定義

第2回：アーキテクチャとドキュメンテーション

第3回：実装と品質管理

第4回：開発手法の変遷と実践

古市浩隆 特任講師 4コマ

第1回：モノづくりに不可欠な品質管理

第2回：製品仕様と規格 および付随する認証、ライセンス

第3回：仕様変更とECN発行および必要なDRBFMの基礎

第4回：DRBFM実施

2-2-3) 先端科学特別講義：研究科必修、後期、2回分実施

1回目：1名実施、2025年9月17日(水)13:30～16:30

勝眞一郎 特任教授 3時間

2回目：3名分担、2025年11月20日(木)14:30～17:40

屋附秀司 特任教授 1時間

黒田翔 特任准教授 1時間

古市浩隆 特任講師 1時間

その他、社会貢献として、下記の通り、出前授業とシンポジウムでの講演を行った。

2-3-1) 県立高校を対象にしたデータ活用出前授業

内容：今年度鹿児島県大島支庁の事業で、「総合的な探究の時間」に活用できるようデータに基づいた地域課題分析とオープンデータ活用について群島内8校で開催

1) 鹿児島県立沖永良部高校 (2025年7月9日(水) 9:45-11:45)

2) 鹿児島県立奄美高校 (2025年7月14日(月) 8:55-10:45)

3) 鹿児島県立喜界高 (2025年9月10日(水) 13:35-14:25)

4) 鹿児島県立徳之島高校 (2025年9月25日(木) 14:35-13:35)

5) 鹿児島県立与論高校 (2025年10月17日(金) 13:40-15:25)

6) 鹿児島県立古仁屋高校 (2025年10月21日(火), 28日(火) 14:30-15:15)

7) 鹿児島県立大島高校 (2026年1月21日(水) 15:10-16:10)

8) 鹿児島県立大島北高校 (2026年2月18日(水) 14:30-15:20)

2-3-2) DXコネクタセンターシンポジウム

日時：2026年2月10日(火) 13:00～17:00

場所：稲盛会館キミ&ケサメモリアルホール

内容：「鹿児島と日本の未来を担う高度情報専門人材育成」— 理工学研究科の地域連携とこれからの挑戦 —というテーマで実施。講演を勝特任教授と屋附特任教授の2名が行

い、最後に両名がパネリスト、松元教授がモデレータとして「生成AI時代の情報教育」というテーマでパネルディスカッションを実施。

最後に今年度の主な実施スケジュールを下表にまとめる。

実施日	時間	科目名	担当	教室・実施形態
4/23(水)	5限目	情報科学実践演習Ⅰ	勝特任教授	71教室
5/21(水)	5限目	情報科学実践演習Ⅰ	勝特任教授	71教室
6/25(水)	5限目	情報科学実践演習Ⅰ	勝特任教授	71教室
7/2(水)	4～5限目	情報科学実践演習Ⅰ	黒田特任准教授	電算機演習室
7/9(水)	4～5限目	情報科学実践演習Ⅰ	黒田特任准教授	電算機演習室
7/10(木)	3～4限目	生体情報システム特論	非常勤講師	
7/16(水)	4限目	情報科学実践演習Ⅰ	黒田特任准教授	電算機演習室
7/23(水)	5限目	情報科学実践演習Ⅰ	勝特任教授	71教室
9/11(木)	3～5限目	情報科学実践演習Ⅰ	古市特任講師	情報・生体学生実験室
9/12(金)	4～5限目	情報科学実践演習Ⅰ	古市特任講師	情報・生体学生実験室
9/17(水)	13:30～16:30	先端科学特別講義	勝特任教授	01教室
10/1(水)	3～5限目	情報科学実践演習Ⅰ	屋附特任教授	電算機演習室
10/2(木)	3限目	情報システム工学特論	黒田特任准教授	リアルタイムオンライン
10/8(水)	4～5限目	情報科学実践演習Ⅰ	屋附特任教授	電算機演習室
10/9(木)	3限目	情報システム工学特論	黒田特任准教授	リアルタイムオンライン
10/10(金)– 10/31(金)		情報科学実践演習Ⅰ	勝特任教授	オンデマンドに変更(欠席者多数のため)
10/16(木)	3限目	情報システム工学特論	黒田特任准教授	リアルタイムオンライン
10/23(木)	3限目	情報システム工学特論	黒田特任准教授	リアルタイムオンライン
10/23(木)	4～5限目	先端科学特別講義	非常勤講師(山口先生)	121教室
10/29(水)	4～5限目	情報科学実践演習Ⅰ	非常勤講師(中平先生)	電算機演習室・対面
10/30(木)	3限目	情報システム工学特論	勝特任教授	101教室・対面
11/5(水)	4限目	情報科学実践演習Ⅰ	非常勤講師(中平先生)	オンライン
11/12(水)	13:00～16:10	先端科学特別講義	非常勤講師(東芝情報システム 大塚先生、青山先生、関根先生)	01号教室
11/13(木)	3限目	情報システム工学特論	勝特任教授	オンデマンド
11/19(水)	4限目	情報科学実践演習Ⅰ	非常勤講師(中平先生)	オンライン
11/20(木)	3限目	情報システム工学特論	勝特任教授	101教室・対面
11/20(木)	4～5限目	先端科学特別講義	屋附特任教授、黒田特任准教授、古市特任講師	331教室・対面
11/27(木)	3限目	情報システム工学特論	屋附特任教授	リアルタイムオンライン
11/27(木)		M1修論発表会		
12/4(木)	3限目	情報システム工学特論	屋附特任教授	リアルタイムオンライン
12/10(水)	3限目	情報科学実践演習Ⅰ	非常勤講師(中平先生)	電算機演習室・対面
12/10(水)	4～5限目	先端科学特別講義	非常勤講師(富士通 大石先生)	01教室・対面
12/11(木)	3限目	情報システム工学特論	屋附特任教授	リアルタイムオンライン
12/18(木)	3限目	情報システム工学特論	屋附特任教授	リアルタイムオンライン
12/25(木)	3限目	情報システム工学特論	古市特任講師	101教室・対面
1/8(水)	3限目	情報システム工学特論	古市特任講師	101教室・対面
1/22(水)	3限目	情報システム工学特論	古市特任講師	101教室・対面
1/29(水)	3限目	情報システム工学特論	古市特任講師	101教室・対面






(3) グローバル人材育成グループ Global Competencies Group 2025 Annual Report

グローバル人材育成グループ・Global Competencies Group (GCG) ミッション:

鹿児島大学大学院のメンバーをグローバル人材にするための支援。

1. 海外研修の運営と支援
2. 理工学研究科内の国際交流支援
3. ランゲージサポート

GCG and SDGs

	We endeavor to provide quality educational programs for our students.
	We seek to reduce inequalities by helping students experience lifestyles different from their own through study abroad. Additionally, our regional activity helps students understand current imbalances at home. Additionally, language study contributes to reducing inequality.
	Building on the sister-city relationship between Perth and Kagoshima, students gain a stronger understanding of both communities. Regional activities strengthen understanding about how technology can contribute to community resilience.
	By partnering with overseas institutions, we strengthen our own, and through this, students are able to gain valuable understanding of other cultures.
	Students are asked to consider their own role in achieving the SDGs, and building on GCG's partnering experiences, consider how collaboration can further their aims.

I. Group Management

1. グローバル人材育成グループにおける年間の主な活動内容

グループ活動運営および業務を円滑に遂行するため、一年を通して月例会及び定例会議を実施した。実施状況は以下の通りである。その他、学生のための説明会、準備会などを実施した。

1. グローバル人材育成グループ月例会議（計 3 回）

参加メンバー：室長、部門長、グループ長、特任専門員

※月例会は、重要な方針決定や必要な協議を行う際に不定期で実施。

2. グローバル人材育成グループ定例会議（計 33 回）

参加メンバー：部門長、グループ長、特任専門員

※基本的に週に 1 回実施。2/26 現在。

	会議・全体	授 業		イベント
		GOES 海外研修	Brush Up English	
4 月	・ 肝付町との打合せ 4/18	・ GOES 説明会 4/2~4 ・ 事前準備会 4/23 ・ 航空券手配 4/24		・ 新入生オリエン テーション 4/1

5月		<ul style="list-style-type: none"> 海外研修支援金 (JASSO 及び鹿児島大学) 手続き開始 海外旅行保険説明会 5/2 事前準備会 5/13,20,29 	<ul style="list-style-type: none"> EdulinX 契約締結 	<ul style="list-style-type: none"> グローバル教育説明会 5/2
6月	<ul style="list-style-type: none"> DX コネクトセンター部門会議出席 6/27 	<ul style="list-style-type: none"> 派遣準備 (各種登録や支払) TOEIC Speaking 実施①6/30~7/6 事前準備会 6/5,10,17,24 	<ul style="list-style-type: none"> 説明会 6/10,11,17(Web) 	<ul style="list-style-type: none"> グローバル教育説明会 6/6
7月		<ul style="list-style-type: none"> 事前準備会 7/1 出発前オリエンテーション開催 7/8 出発 7/12 研修開始 7/15 		<ul style="list-style-type: none"> グローバル教育説明会 7/4
8月		<ul style="list-style-type: none"> 派遣中の支援 	<ul style="list-style-type: none"> 事前授業説明会 8/5,7(Web) TOEIC L/R 実施① 8/7~14 授業 8/19~9/19 	
9月	<ul style="list-style-type: none"> 次年度 JASSO 海外留学支援制度計画書作成、提出 	<ul style="list-style-type: none"> 研修終了 9/20、帰国 9/22 帰国後集合 9/25 	<ul style="list-style-type: none"> TOEIC L/R 実施② 9/24~10/1 アンケート実施 	
10月		<ul style="list-style-type: none"> TOEIC Speaking 実施②9/29~10/5 GOES 研修終了発表会 10/28 アンケート実施 		<ul style="list-style-type: none"> グローバル教育説明会 10/3
11月		<ul style="list-style-type: none"> GOES2026 パンフレット、費用詳細制作 GOES2026 申込書作成 		<ul style="list-style-type: none"> グローバル教育説明会 11/7
12月	<ul style="list-style-type: none"> 全 B4 学生への広報、GOES パンフレット配布 次年度鹿児島大学学生海外研修支援事業申請書作成、提出 	<ul style="list-style-type: none"> 次年度航空券手配 海外研修説明会 12/24 申込開始 		<ul style="list-style-type: none"> グローバル教育説明会 12/5
1月	<ul style="list-style-type: none"> 活動報告書作成開始 	<ul style="list-style-type: none"> 海外研修説明会 1/14,23,28 		<ul style="list-style-type: none"> 理工研 Global 交流会イベント 1/9
2月	<ul style="list-style-type: none"> 2025 年度 JASSO 実施報告書作成・提出 2026 年度 JASSO 海外留学支援制度採択通知受理 	<ul style="list-style-type: none"> 海外研修説明会 2/6 		<ul style="list-style-type: none"> DX コネクトセンターシンポジウムパネル展示 2/10
3月	<ul style="list-style-type: none"> 活動報告書完成 DX コネクトセンター部門会議出席予定 			

II. Programs

1. GOES 2025

科目名: グローカルイノベーションのための英語研修

期間: 7月12日-9月29日 (11週間)

参加人数: 3名

1.1 Instruction

Due to the restructuring of our office under the DX Connect Center umbrella, and resulting changes in staffing, the content and scope of the 2025 Graduate Overseas Experiential Study (GOES) was not changed from the previous year. In 2025, three students from Electrical Engineering, Civil Engineering, and Informatics participated in the program.

Pre-departure preparation

Prior to dispatching students to Australia, they participated in Junbikai. This one-hour weekly workshop focused on learning daily language and important cultural information through guided conversation. The dialogues used in these workshops were based on real-life experiences faced by previous program participants. Students were supported in completing a study abroad plan, including personal goals for language acquisition, professional development, and global awareness.

Orientation

This year's students traveled unaccompanied, and were encouraged to follow a similar itinerary to last years' orientation program in order to get used to riding the bus and train and familiarize themselves with the city early on. As in previous years they also received a membership at Boola-Bardip, the new state museum for Western Australia. This allowed them unlimited free entry to all regular exhibits to provide the opportunity to improve both cultural and scientific understanding, and their language skills. Orientation included a required first visit to the museum.

Study Abroad

In 2025 students were able to join the Visualization Conference at Pawsey Supercomputer facilities, as observers. Through this experience they were able to learn about innovations in data visualization. At the end of their stay, students were able to meet with University of Western Australia International Center for Radio Astronomy Research (UWA ICRAR) researchers to learn about cross-disciplinary research culture abroad.

After returning, students shared their experiences with faculty and other students.

TOEIC Results

Participating students took the TOEIC Speaking test prior to departure and once again upon return. The student with a low initial score maintained their score, the student with the highest score improved by 10 points and the student who started out with an intermediate score improved by 20 points.

1.2 GOES 海外研修費用および参加学生のための支援金

2025年度GOESプログラムは、2024年度同様に現地（オーストラリア パース）で開催することができた。学生本人が各費用を事前に支払い、次の2種類の支援金が給付された。

<研修費用について>

2025年度の費用合計は、一人あたり1,136,000円であった。語学学校への支払い、ホームステイ費用、航空券、海外旅行保険等の合計金額である。

<支援金について>

支援金は以下2種類へ申請し、次の通り承認され、条件を満たした学生が支援金を利用した。

A. 鹿児島大学学生海外研修支援事業（タイプB）

- ・ 授業科目名：STEM のための国際コミュニケーション海外研修（GOES）
- ・ 採択支援学生数：3 名
- ・ 受給人数：3 名

B. JASSO 独立行政法人日本学生支援機構海外留学支援制度（協定派遣タイプ B）

- ・ プログラム名：STEAM 系大学院生のための学際・国際コミュニケーション海外研修
- ・ 奨学金支給割当人数：16 名
- ・ 受給人数：3 名 ※うち 1 名が渡航支援金（一定の家庭基準を満たす者）を受給

	費用明細	日本円	豪ドル
研修費等支払い	語学学校入学手続き費用		\$300.00
	語学学校授業料		\$4,500.00
	語学学校教材費		\$150.00
	Smartrider (TransPerth 乗車券)		\$80.00
	ホームステイ会社手数料		\$350.00
	ホームステイ代 (10w + 1 d)		\$3,850.00
	送迎費 (往路のみ)		\$170.00
	オーストラリア入国ビザ申請費		\$20.00
	海外旅行傷害保険	¥21,910	
	渡航費	¥200,350	
	支払い小計	イ ¥222,260	\$9,420.00
	日本円で換算(\$1 = 97 円)		□ ¥913,740
	支払い合計 (日本円) イ + □		① ¥1,136,000

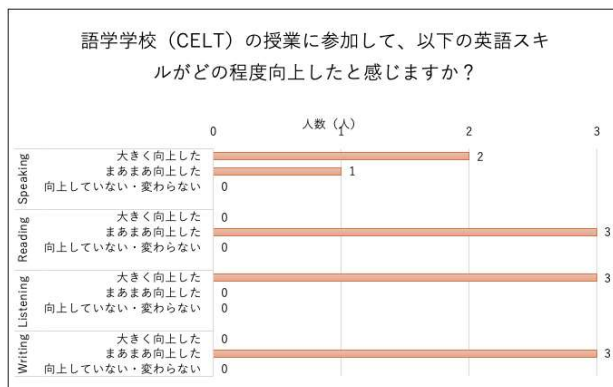
		JASSO 渡航支援金受給者を除く	JASSO 渡航支援金受給者
支援金受給	A. 鹿児島大学学生海外研修支援事業	¥230,000	¥230,000
	B. JASSO 日本学生支援機構奨学金 (奨学金月額)	¥270,000	¥270,000
	” (渡航支援金)	¥0	¥160,000
	支援金小計	② ¥500,000	② ¥660,000
	支援金適用後の海外研修費 (①-②)	¥636,000	¥476,000

<最終的な費用負担について>

上記、A. 鹿児島大学学生海外研修支援事業 230,000 円（渡航費支援 80,000 円+授業料支援 150,000 円）および B. JASSO 日本学生支援機構奨学金 270,000 円（90,000 円×3 か月及び渡航支援金 160,000 円）の 2 種類の支援金を併用することができた。その結果、学生一人あたりの総費用 1,136,000 円に対し、実質負担金額は 636,000 円または 476,000 円に軽減された。

1.3 Student Feedback

Participants in this years' program gave the following feedback in response to the exit survey:

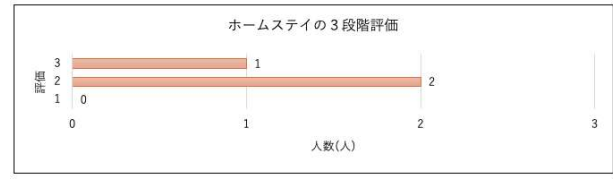


語学学校 (CELТ) 全体を通しての感想や意見

一か月に一回ごとにチームが入れ替わる制度で、合計2期の授業を行った。あのチームは日本の夏休みと被っているので、そのチームは日本人がたくさんいた。(クラスの7.5割が日本人のイメージ。ただし、クラスによって振幅はある。) 逆に最初のチームは自分のクラスに1人しかいない状況だった。毎日、8:30 から学校があるため、生活習慣が良くなった。入学時に75\$含まれたスマートライダーを渡されたが、おそらくその値段は2か月分に等しくない。実際に300\$近くチャージしたので、通学以外の交通機関による値段を考慮しても75\$は正しくないと考えている。

語学学校に関しては、大変満足だった。学習環境が整っていたり、交流イベントが充実したりしており、教師の質も非常に高かった。しかし、語学学校が原因ではないが、8.9月は日本人が多かったため英語を使う機会が減っていたことがマイナスであると感じた。

授業はクラス別となっており自分の学習能力に見合った学習ができる点がいい点だと思いました。また定期的に行われる試験で自分の成長を実感できたことも英語力向上につながった要素だと思います。授業内容は受け身の授業ではなくアウトプットに特化したスピーキングやグループディスカッションがメインで異国の人とコミュニケーションをとる中で実践的な英語学習ができました。定期的に行われる動物園や美術館の見学などで現地の文化を学ぶこともできました。



ホームステイの環境について

ホームステイは当たり外れがとてもあると感じている。個人的に大事なところはルームメイトの有無だと考えている。生活面(食事、お風呂)のはずれは仕方ないと感じているが、目的が英語を学ぶことなので、コミュニケーションをとることができるルームメイトの存在は大きいと感じているし、自分自身もルームメイトとの会話で大きく英語力を伸ばした。

他の代理店の方が立地が良かったりきれいなホームステイ先が多い印象であったが、特にトラブルはなかったため満足である。

ただ、ホームステイ先を変更する際の対応などは少し問題があるのではないかと感じた。ホストファミリーに関してはフレンドリーで優しくかった。食後以外にホストファミリーと交流する機会がなかったのは少し残念である。

私のホームステイ先は私以外にも日本人1名、フランス人2名、ドイツ人1名の計4名ホームステイをしており留学生の受け入れに特化していました。食事の時間はバラバラな時もありましたが基本はホームマザーと他の留学生と食事をとることが大半で異国の人の会話もいい経験になりました。キッチンやシャワー等自由に使用が可能でしたが、シャワーの長時間の使用や洗濯機を高頻度で使うと注意をされます。またバースの住宅には基本エアコンが室内になく渡航直後は冬だったこともあり夜は寒くてなかなか寝付けなくジャケット等を持って行かなかったことを後悔しました。飲み物の値段が高いので水筒を持参し家でコーヒーなどを入れて外出するのがいいと思います。



支援室のサポート体制について

【良かった点】

- 事前の準備(航空券、申請書類など)に関して手厚いサポートがあった。準備会で実践的な英語の勉強をしてくれたこと。
- 学会や研究室訪問は自主的にすることは困難であるため、現地でのイベントに参加する機会を与えてくださった点是非常に感謝している。
- 本来であれば航空券など自分で用意しなければならないものを代わりに早い段階で用意していただいたのは助かりました。また留学までしなければならぬものをリストアップし毎週必要な書類などを確認できたので的確に準備を進めていくことができました。また現地で必要な会話練習も留学準備期間に少しですができたので現地で役に立ちました。支援室の方たちは明るく一緒に準備を進めることができ楽しむことができました。

【改善してほしい点】

- 課題を提出するために使った teams の性能があまりよくないと感じた。
- 事前の準備会でバースにある家の特徴をもう少し詳しく教えてほしい。(自分の部屋に暖房がないので寒い日も我慢しないといけない。)
- 自分たちで解決しようとする力は身についたが、説明が不十分どころが多かった。
- 留学期間中のオンラインのビデオ通話も勇気づけられたのもっと頻繁にしてもいいのかなと思いました。



<p>今回の海外研修を通じて、ご自分の研究に対する考え方・社会に対する考え方は変化したと思いますか。また、それはどのようなことですか？</p> <p>研究に対する考え方は特に変化はなかった。(もともと国際思考だった)</p> <p>社会に対する考え方はさまざまな背景を持つ人がいると感じた。</p> <p>研究に対する考え方は変化しなかったが、海外の学生の勉学に対する意欲や、卒業および就職するために勉学に励む姿勢は見習わなければならないと感じた。</p> <p>私の研究内容はコンクリートでの世界で使用・研究をされている分野になります。また私自身将来的にも海外で働くことも考えられます。研修を通して海外のコンクリートや施工現場を目にすることもあり、海外の施工管理方法など学びたいと思ったきっかけになりました。</p>	<p>GOES プログラムに参加をしてみて、他の学生に勧めたいと思いますか？それはどのような点ですか、またはなぜですか？</p> <p>勧めたいと思う。異国の人々と母語以外でコミュニケーションが取れることのすばらしさ、海外で英語を学ぶことで日本より英語力の成長が実感できること、様々な国との友達を作ることができることを伝えたい。</p> <p>勧めたいと考える。母語が通じないという環境に身を置くことで大きく成長できると感じるからである。また、就職後に英語を学習することは非常に難しいと考えているため、時間がある学生のうちにある程度の英語力を身につけることで大きな利点があると考える。</p> <p>今回2か月半の留学ではありましたが、異国の人とのコミュニケーションや文化を学ぶ中で視野が広がらず海外で働きたいという気持ちが留学前よりも強くなりました。もちろん自分の英語力がなく会話がうまくできないことも多く悔しい思いも何度もしましたがそれも含めていい経験になりました。なかなか大学院のプログラムで休学をせずに2か月半も海外に行く機会はないと思いますので海外に興味のある学生には勧めたいです。自分の英語力やコミュニケーション能力など日本にいたままでは見つけることのできない自分の課題も今回の留学を通して見つけることができました。課題を見つけることができたので次海外に行く日に向け英語学習を続けることにも繋がりました。</p>
<p>もしも、今回経験したプログラムに変更を加えたとしたら、どのように変えてみたいと思いますか？今回経験したことに、追加したいこと、または、なくてもよかったと思うことはありますか？</p> <p>学会のレベルを下げると思います。あまりにもレベルが高くて逆に退屈でした。もしくは学会をプログラムの後半にすることが良いと思いました。出来るなら保険の適用で国際免許を使えるようにすると思います。</p> <p>研究室訪問は必要ないのではないかと感じた。海外の研究室を訪問するという機会は非常に貴重であったが、短時間かつ母語ではない状況でお互いの研究について理解することは難しいと感じた。現地の学生も日本の文化に非常に興味を持っており、アニメの話で盛り上がったが研究の話の興味は持っていない印象である。</p> <p>現地の学会発表の参加は内容も難しく、自分の研究に関連したものでもなかったのほとんど理解することができませんでしたので、英語力が身に付き始めた終盤か自分の研究分野に関連した学会に参加する方が自分のためにもなるのではないかと感じました。</p>	

Due to the feedback given above, we have decided to change the timing of the study abroad period for next year. This change will help to attract more M1 students, who are the main target for this program. Considering the exclusive participation of M2 in recent years, and the feedback they have given, much of the discontent can be attributed to their proximity to graduation and joining the workforce.

2. GOES Home グローバル研修

科目名: グローバルイノベーションのための英語研修

期間: —

参加人数: 0名

In 2024 we collaborated with the island education program held by the Graduate School of Health Sciences (Nursing) to host visiting architecture students from Florida Agricultural & Mechanical University (FAMU) for a visit to Koshikijima. We faced difficulties recruiting KU students for the program as FAMU students arrived at the start of 2nd semester. However, by cooperating with Nursing and Veterinary departments the joint education program succeeded.

In 2025 FAMU faculty asked the Architecture and Architectural Engineering Program to host FAMU architecture students, and the request was accepted. While the Architecture Program hosted the event this year, there was no mechanism to award credit for グローバルイノベーションのための英語研修科目 by the Architecture Program, and student recruitment faced similar difficulties to 2024.

As a result of this situation, GCG developed a process for any faculty connected to the Graduate School of Science and Engineering to award credit to students for グローバルイノベーションのための英語研修科目 from 2026. This process is outlined in section 5.2.

3. Brush Up English E-learning

科目名: 大学院生のためのブラッシュアップ英語 A

期間: 令和7年度 8月18日～9月19日 (5週間)

参加人数: 21名

3.1 e-Learning

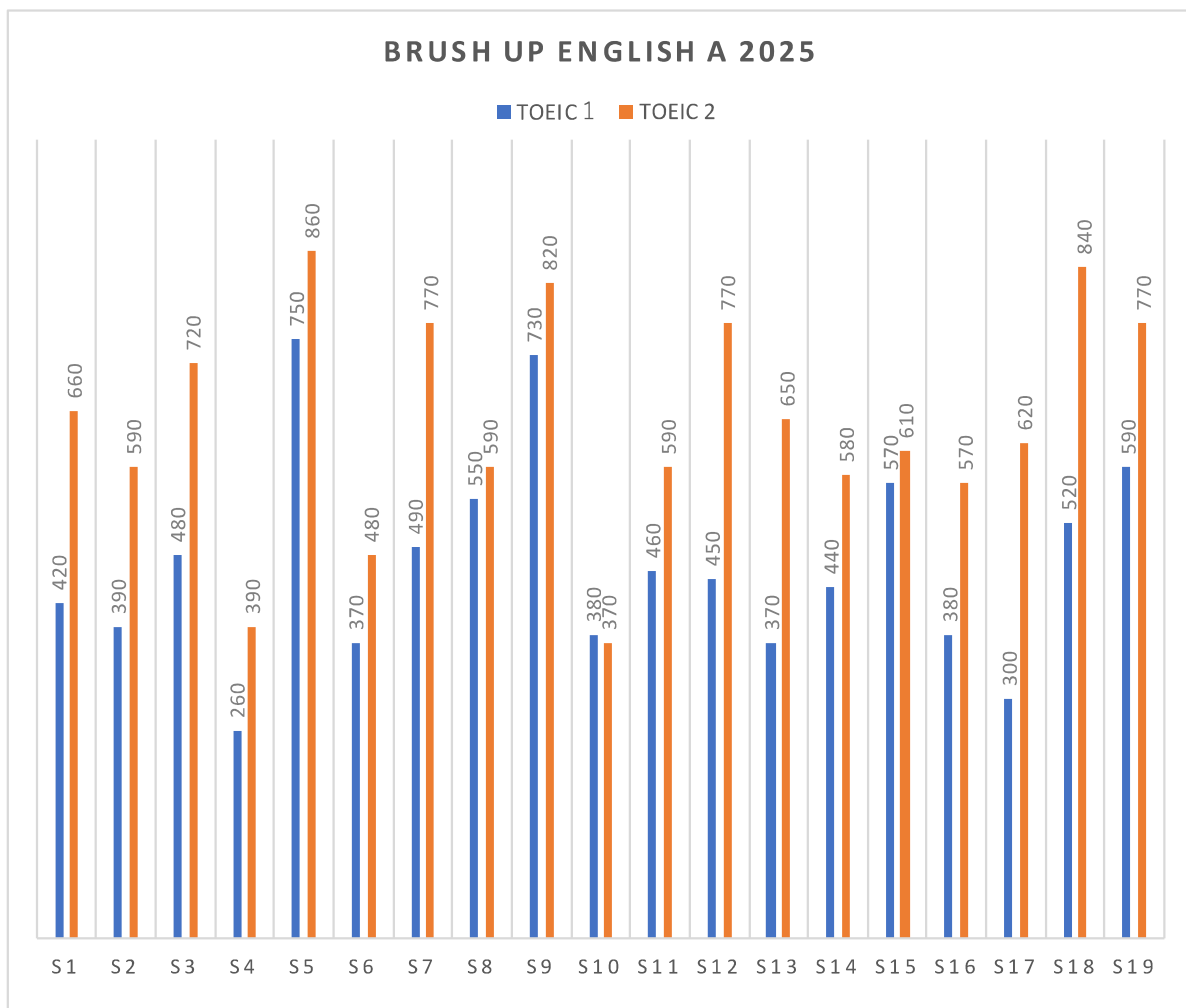
Edulinx provided the e-learning platform for this course. It included a half-length TOEIC practice test, administered twice, and access to a maximum of 100 30-minute English training lessons. Based on student results, the system provides lessons at the appropriate level. Students can repeat the lessons as often as they want, and are allowed to check the answers. The system registers this activity, and there is an instructor report which allows the instructors to monitor student activity, including how often they access the system, how long it takes them to complete each session, how often they try each training lesson, whether they do so after checking the answers, and their results.

3.2 Daily communication

In order to apply the language they studied in the training lessons, students took turn leading a daily 30-minute communication session. The sessions were held at 10:00am and 17:30pm in Teams, and students were randomly assigned 'icebreaker' communication games. Leaders introduced the game and its rules, and encouraged the other students to participate. Students were free to choose which session to join, and were required to join a minimum of 17/25 sessions. All of this was explained in the information session held prior to the start of the course, and at the end of the first few online meetings.

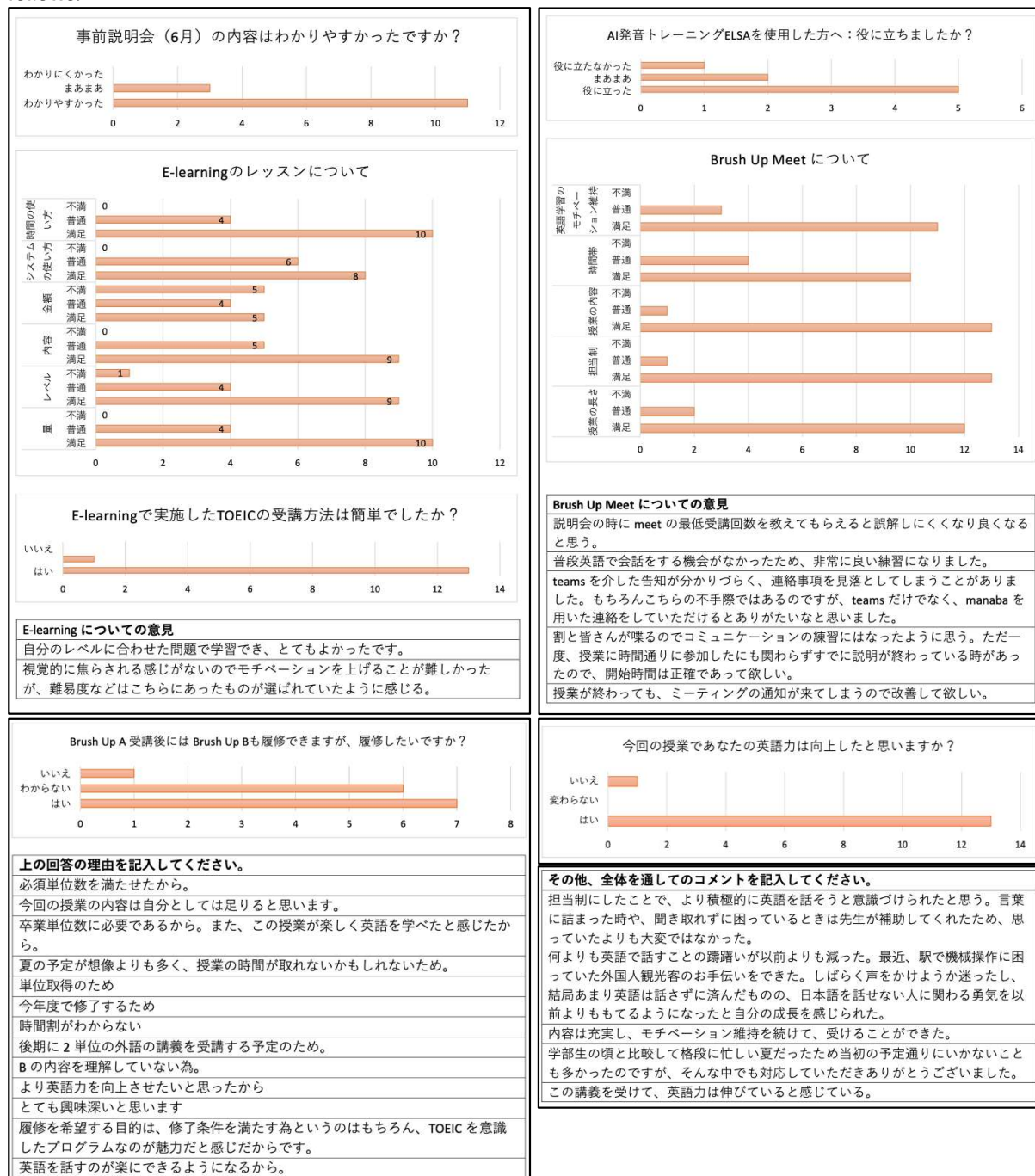
3.3 TOEIC Results

Students made considerable advancements in their scores for the Half-sized TOEIC training test provided by Edulinx. One student (S10) had a 10 point decrease, but this student also waited until two days before the course ended to do all of the e-learning training lessons. All other students were able to increase their score. It is worth noting that the test contents were identical in both the pre- and post-tests.



3.2 Student Feedback

At the end of the course students were asked to answer a survey about the course. The results are as follows:



The initial information session in June was held online, and due to various difficulties, we have decided to hold the session face-to-face in 2026. The e-learning was quite well received. There was some negative feedback about the cost, (¥7150 including a TOEIC half-test held twice and full access to course materials from August-December 2025). However, students have access to the course materials for 3 months after the course ends, and can keep practicing. Yet, to date no students have continued, despite encouragement at the end of the course to do so. This suggests that the materials are not especially motivating. The AI pronunciation had an extra cost, so it was offered as an option. The students who used it found it helpful, so it may contribute to positive motivation.

The Brush-Up Meet sessions were particularly well received, despite the fact that students were often observed to struggle to communicate during the meetings. In particular, students felt their English had

improved, and felt more confident to try. While students show a strong intention to follow up by taking Brush-up B in M2, whether or not they actually register will give a good indication as to their long-term positive impression of the course.

4. Support for Global Competencies

4.1 Learning

English Workshops

- English Workshop for Staff

The workshop staff continued for its 8th year, expanding to six regular members, including original Technical Division staff, and DX Connect Center and Architecture office staff.

Courses

理工学研究科 大学院科目：

- STEM のための国際コミュニケーション海外研修 (GOES) 3 名
- グローバルイノベーションのための英語研修 (GOES Home) 0 名
- 大学院生のためのブラッシュアップ英語 A (Brush Up) 21 名、オンデマンド
- グローバル サイエンスコミュニケーション (英語) 33 名、1 コマ
- Technology in the City : 英語でのリサーチ戦略 6 名、1 コマ
 - 工学部 科目 3 コマ 180 名

4.2 Support for Partnerships

- 1) Visit to partner university, Florida A&M (FAMU) including meetings with the International Division, Dean of Engineering, Dean of Environmental Science, and Associate Dean of Architecture. Topics included development of a possible summer program, exchange of Masters's level students in Engineering, potential to co-host a symposium, and counseling for potential Architecture exchange students, as well as extensive discussion about how structural changes within the Architecture and Engineering areas in KU could increase exchange opportunities between schools and/or lead to the establishment of joint degrees



- 2) Creation of English-language promotional materials for the Faculty of Engineering faculty to use when introducing the Faculty to partner institutions.
- 3) Organizational support for the Erasmus TPIT program
- 4) Organizational support for Yamaguchi University/UCL joint Engineering program development
- 5) 「作って学ぶ構造力学の世界」 Kimotsuki-cho educational event
- 6) New Year Event for International and Domestic student exchange



5. 2026 Program Development & Recruitment

5.1 GOES 海外研修

Since the end of restrictions relating to the COVID pandemic, resulting from changes in how companies conduct job hunting activities, recruiting new students for GOES has been difficult due to the summer session overlapping with prime internship season for M1 students. While Japanese universities send many students to language schools after Obon, resulting in a large influx in popular destinations, in 2025 political uncertainty in historically popular destinations in the US resulted in a large-scale switch to Australian destinations. Feedback from students since the resumption of overseas travel, and particularly from the 2025 cohort, indicated that shifting the timeframe of the program would allow our students to complete study abroad before job hunting begins, while also having low to moderate levels of Japanese classmates at the destination language school. Therefore for the 2026 session of GOES, students will depart at the end of T1, on June 6, and return at the beginning of summer vacation, on August 16. We will monitor student experience and feedback, and if this timing is successful, will continue with it into the future. However if it is too disruptive to student studies, we will reconsider the timing.

GOES 海外研修 2026
Graduate Overseas Experiential Studies
大学院生向け海外研修

Perth Australia パース・オーストラリア
令和8年6月06日～8月16日(10週間)

語学学校 西オーストラリア大学附属
語学学校 CELT で、英語を学ぶ
10週間、月～金、8:30～12:45
授業は7レベルあり

研究体験 西オーストラリア大学
電気天文学研究所長学
パーズパソコン留学
研究室との交流など

地元学生交流 日本語専攻学生と交流
(英語)
西オーストラリア大学
の活動も可能

宿泊 語学学校の周辺の
家族にホームステイ
研修・学習材

CELTS 2025 Student Voice

この研修を通して自分が一番楽しかったことは、「知らない世界」に出れたことです。授業後はのどろろと「留学中の生活」や「文化の違い」を話して、留学が楽しかったことを話しました。しかし、自身も海外の人も多く、話さずに済まないくらいで、少しづつ英語の勉強が必要になりました。留学中の生活が楽しかったこと、話さずに済まないくらいで、少しづつ英語の勉強が必要になりました。留学中の生活が楽しかったこと、話さずに済まないくらいで、少しづつ英語の勉強が必要になりました。

GOES 海外研修は 4単位の科目です!
[TOEIC]の目的
国際コミュニケーション海外研修科目

海外研修前、海外研修後の TOEIC 比較 ⇒ 30%

海外研修中のレポート(毎週2回、英語) ⇒ 35%

海外研修後の研修体験発表(英語) ⇒ 35%

本邦日は就業活動の準備のために、大学院生が海外研修をつくる機会です。語学学校のみではなく、地元学生との交流のチャンス。2泊5日、自分自身での現地調査など、さまざまな経験を10週間にわたるよう海外生活によって、国際コミュニケーション能力が必ず伸びますので、それ以外に運動も取れます。研修の感想をぜひご感想ください。心置きなく海外研修してください。「グローバル教育支援室」は以下の支援を行います!

- 出発までに、毎週「事前準備会」で、日常会話、危機管理、海外文化・生活法などの研修を行います。
- 語学学校、ホームステイ、旅行、実習の手続きを支援します。
- 研修中、緊急確認または中間報告・相談もします。
- あなたの成長を応援します!

1. 週間の例

時	月	火	水	木	金	土	日
08:30	研修	研修	研修	研修	研修	研修	研修
12:45	研修	研修	研修	研修	研修	研修	研修
13:30	海外研修	海外研修	海外研修	海外研修	海外研修	海外研修	海外研修
16:00	自習	自習	自習	自習	自習	自習	自習

研修費用

研修費	-¥620,000
ホームステイ	-¥420,000
航空券	-¥200,000
ビザ、保険	-¥90,000
その他	-¥1,200,000

支援金給付については本学確認して下さい!

海外研修、費用、研修費など、本学から、事前に入寮、研修10週間の費用等は本学からサポート(2泊5日)は、研修費以外の研修費が本学から、詳しくは研修費を本学から確認して下さい。

説明会の日程はこちらでご覧ください!

おすすめの申込の流れ:

- 参加申し込み、研修費、グローバル教育支援室へ相談する 12月～3月
- 申込書を出す、支援金条件を確認する 1月～2月
- 研修費を研修費加算で確認し、10週間プログラムも、研修費 3月
- 海外研修参加費、研修期間と研修費用支払いが開始する 4月
- 研修期間と研修費用支払いの研修「事前準備会」は研修費 5月
- 海外研修オンライン研修 6月

申し込みは4月6日までですが、支援金は先着順ですので、ご確認ください。

運営担当
鹿児島大学大学院工学研究科
DXコネクティブ人材育成部門 グローバル教育支援室
globaljinzai@eng.kagoshima-u.ac.jp 099-285-7889
https://globaljinzai.eng.kagoshima-u.ac.jp

Recruitment has been carried out by printing the following pamphlet and distributing it to all 4th year students in the faculties of Science and Engineering.

Information sessions on study abroad in general were held for all 3rd and 4th year students at lunchtime on the first Friday of every month, and information sessions about GOES specifically were held once at the end of December, three times in January, once in February and twice in March.

Brush-Up 英語 e ラーニング

The course was easy to monitor and the report provided by Edulinx was thorough and allowed for nuanced evaluation. Having students lead communication games was effective for communication. One point that became apparent was that although we held an online explanation session at the beginning of the course, students had some difficulty understanding the requirements at first. As a result, next year we plan to hold one face-to-face orientation session prior to course start in 2026.

GOES Home グローカル研修

For 2026, GCG developed a process for any faculty connected to the Graduate School of Science and Engineering to award credit to students for グローカルイノベーションのための英語研修科目

教育計画書	履修登録書	報告書
--------------	--------------	------------

グローバルイノベーションのための英語研修科目 教育計画申込書		グローバルイノベーションのための英語研修科目 履修登録書		グローバルイノベーションのための英語研修科目 報告書		
提出日付		提出日付		提出日付		
担当教員		受付番号		受付番号		
理工学研究科プログラム		担当教員		理工学研究科プログラム		
共同大学等の名称		理工学研究科プログラム		共同大学等の名称		
実施予定期間		共同大学等の名称		実施予定期間		
実施場所		実施予定期間		実施場所		
参加予定人数等	本大学 共同大学等	実施場所		事業名		
事業名		事業名		事業報告		
事業案内(予定)		参加学生名簿書				
グローバル活動		学籍番号	氏名	参加学生名簿書	学籍番号	氏名
言語	<input type="radio"/> 日本語・英語・その他					成績※
事務						
引き取り日付						
受付番号						
下見日付						
確定	賛・不					

※成績＝P・F・録

In this way, students can reliably receive credit for participating in educational exchange activities. With this relatively simple standardized process, novice professors can confirm the content and evaluation of their activity without worry, and experienced professors do not need to establish a new course to facilitate exchange. Furthermore, with this process in place GCG can offer support for the exchange activity. Prior to this initiative, professors did not know who to ask for assistance, and GCG did not know where assistance was needed. We hope that this initiative encourages more professors to conduct joint educational exchange activities with overseas partners.

(4) インターンシップ支援グループ

① グループ会議の実施

- ・2025年5月8日（木）
- ・2025年6月9日（月）
- ・2025年7月11日（金）

② 学生支援・派遣

通年、研究インターンシップに関する問い合わせ対応・情報提供、応募書類の確認、企業への応募作業、3者面談対応、面談後アドバイス、インターンシップ前・後のフォロー、報告会出席などを実施した。今年度は3名面談を行い、1名をC-ENGINEを通じて株式会社三菱電機へ派遣した。

③ 説明会、報告会

理工学研究科DXコネクセンター事務局主催による「大学院生のための研究インターンシップ説明会2025」を3回開催した。冒頭ではDXコネクセンター長小山先生のあいさつ、研究インターンシップを体験した学生による体験談の報告、また事務局よりC-ENGINE事業制度の説明解説とインターンシップ支援について説明がなされた。最後に質疑応答が行われ、学生間での情報交換や交流の場となった。

開催後にアンケートを回答してもらい、おおむねインターンシップへの興味や理解を得られたようである。

参加対象： 大学院博士前期課程・博士後期課程、大学院進学希望の学部生

会 場： 建築学棟1号館1階レクチャールーム

【第1回】

日 時： 2025年6月3日（火）

参加人数： 21名



【第2回】

日 時： 2025年7月18日（金）

参加人数： 12名



【第3回】

日 時： 2026年2月17日（火）

参加人数： 9名



④ 協力企業

DXコネクセントセンターでは、研究インターンシップの受入先企業を随時募集している。本年度は研究インターンシップに関する問い合わせの対応の他、昨年度の協力企業の今後の方針について確認を行った。令和7年度で、研究インターンシップの受入先として紹介している企業は以下の通りである。

協力企業： 1社 ・米盛建設株式会社

⑤ 一般社団法人産学協働イノベーション人材育成協議会(C-ENGINE)

企業の発展のためには、様々な分野から多彩な人材を集めていかなければならない。一方、大学での研究分野はより細分化され、専門性が高くなる反面、企業から理解しにくいケースが増えてきている。そこで、経済産業省の支援のもと、12の大学が企業8社と連携し、当協議会が一般社団法人として2014年1月に発足した。鹿児島大学は2016年より参画している。

⑥ ジョブ型研究インターンシップ推進協議会

「ジョブ型研究インターンシップ」とは、産業界と大学が協力して大学院教育の一環として実施する長期・有給・ジョブ型のインターンシップ制度であり、2021年に設立された。2026年2月1日時点で、75企業・112大学が参画する協議会である。ジョブ型インターンシップの定義については以下の通りである。

- ・研究遂行の基礎的な素養・能力を持った大学院学生が対象
- ・長期間（原則として2ヶ月以上とし、内容に応じて短くすることも可能）かつ有給の研究インターンシップ
- ・正規の教育課程の単位科目として実施
- ・本ガイドラインに沿ったジョブディスクリプション（業務内容、必要とされる知識・能力等）を提示
- ・インターンシップ終了後、学生に対し面談評価を行い、評価書・評価証明書を発行
- ・インターンシップの成果は、企業が適切に評価し、採用選考活動に反映することが可能（引用）

文部科学省「ジョブ型研究インターンシップ（先行的・試行的取組）実施方針（ガイドライン）」

理工学研究科ではこれまでに1件の派遣実績がある。引き続き動向に注視し、説明会などの情報提供を行っていく。

⑦ コーディネーター活動

研究インターンシップ推進のための活動を以下に示す。

一般社団法人 産学協働イノベーション人材育成協議会	
2025年5月30日(金)	第12回通常社員総会
2025年5月30日(金)	特別講演会 誰かのために、他の人や過去と違える力
2025年6月19日(木)	春季学生と企業の「テーマ別」交流会2025
2025年6月30日(月)	説明会
2025年7月11日(金)	博士大学院生のCHIの交流会
2025年7月31日(月)	説明会
2025年8月29日(金)	説明会
2025年9月16日(火)	2025年度定期オンライン面談
2025年10月31日(金)	大学役員・企業幹部意見交換会
2025年10月31日(金)	C-ENGINEシンポジウム2025
2026年2月24日(火)	C-ENGINE大学コーディネーター会議・大学企業窓口意見交換会
文部科学省主催 ジョブ型研究インターンシップ推進協議会	
2025年4月15日(火)	説明会(日本語)
2025年4月23日(水)	書面審議(新規入会承認)
2025年5月1日(木)	説明会(英語)
2025年6月17日(火)	書面審議(新規入会承認)
2025年7月1日(火)	説明会(日本語)
2025年9月1日(月)	説明会(日本語)
2025年9月19日(金)	書面審議(新規入会承認)
2025年11月5日(水)	書面審議(新規入会承認)
2025年12月4日(木)	書面審議(新規入会承認)
2026年1月14日(水)	書面審議(新規入会承認)
2026年2月17日(火)	書面審議(新規入会承認)
2026年3月17日(火)	第14回運営委員会にかかる説明会および書面審議

2.3 先端研究・地域連携部門

本部門は、本学理工学研究科の強み・特色である6つの研究領域と「SDGs推進事業」、「コトづくり支援ラボ」により構成され、本研究科の先端研究、革新的な技術開発につながる新しいシーズの創出、地域のニーズに対して本研究科のシーズを結び付けて産学共同研究・地域イノベーション創出を推進・支援し、地域社会における安全安心な暮らしと地域社会・産業の発展に寄与することを目指している。今年度は、本部門には8つの研究会が設置され、本学教員と地域の企業や支援者が協働して地域の課題に取り組んでいる。

(1) 令和7年度DXコネクセンター所管研究会一覧表

設置領域	領域長	研究会名	代表者	研究会概要
地域創生・安全工学	酒匂 一成 (海洋土木工学)	コンクリート構造物の診断技術研究会 (H29. 1. 10～)	審良 善和 (海洋土木工学)	コンクリート構造物に対する維持管理の重要性に鑑み、建設後の構造物の状態を正しく診断するための既存技術の応用および新技術の開発研究を行うと同時に地元で活躍する土木技術者の技術力向上を図る。
		加工計測IoT研究会 (H29. 2. 1～)	熊澤 典良 (機械工学)	機械加工の高度自動化を行うための加工計測、状態監視、制御、IoTを統合するシステムの研究を産学官で推進し、そのノウハウにより県内企業の生産性の向上に寄与することを目指す。
		鹿児島版地盤情報データベース研究会 (H29. 4. 1～)	酒匂 一成 (海洋土木工学)	これまでに県内のボーリング等のデータ収集に取り組み、これらのデータを元に鹿児島県の任意の三次元地盤図を表示・活用するためのシステムの構築などを行ってきた。構築してきたデータベースの内容向上や土木技術者などを対象にした利活用方法について検討し、システムの実用化を目指している。
		火山ガラス微粉末の社会実装に向けた研究会 (R7. 7. 24～)	山口 明伸 (海洋土木工学)	鹿児島県内に広く分布するシラスを原料とする火山ガラス微粉末(VGP)は、コンクリートの混和材として新たにJISに追加されたものの、未だ十分に活用されている状況にない。本研究会では、VGPの

				<p>用途拡大と社会実装に資する産官学連携の活動を推進することを目的とする。</p>
環境・エネルギー	鷹野 敦 (建築学)	<p>ライフサイクルハウス研究会 (H29. 4. 1～)</p>	<p>鷹野 敦 (建築学)</p>	<p>木材のみで建物を作る「Jログ工法」を基盤とし、木材の特性を最大限に活かした”人”にも”自然環境”にも最適な新しい木質工法システム（ライフサイクルハウスシステム）の研究開発を行う。</p>
		<p>資源リサイクル研究開発研究会 (R6. 4. 1～)</p>	<p>加藤 太一郎 (化学)</p>	<p>脱炭素化の流れを実現するためには、これまで廃棄物とみなされていた化石燃料由来の化学製品をリサイクルして再利用する取り組みを推進すると同時に、そもそも化石燃料に依存しない基幹物質の生産推進が必要不可欠です。本研究会では、化学とバイオの知見を有する研究者が集まりその強みを組み合わせることで、持続的社会の発展と地域産業の高度化を推進する地域イノベーションを創出し、資源リサイクル問題の解決につなげます。</p>
先端物質材料開発	<p>二井 晋 (化学工学)</p>	<p>食品加工開拓研究会 (H29. 1. 16～)</p>	<p>武井 孝行 (化学工学)</p>	<p>卵白や黒酢等の食品加工を視野に入れた独自の粉体化と経験的に効果がある素材での機能性成分の特定、抽出、複合化等の技術に興味をもつ南九州地区の産学官の交流・討議の場とする。</p>
天文学	<p>片野田 洋 (機械工学)</p>	<p>鹿児島ハイブリッドロケット研究会 (H29. 1. 10～)</p>	<p>片野田 洋 (機械工学)</p>	<p>小型ハイブリッドロケットに必要な各種要素技術に関する情報収集と各自技術の開発を行い、県内企業とも協力しながら鹿児島県産小型ハイブリッドロケットの製造と打ち上げを目指す。</p>

(2) 令和7年度DXコネクセンター所管研究会活動報告
各研究会の活動報告について報告する。

令和7年度 DX コネクトセンター所管研究会活動報告書

研究会の名称	コンクリート構造物の診断技術研究会		
代表者	氏名	審良 善和	
	所属	理工学研究科 海洋土木工学プログラム	
設置領域	地域創生・安全工学		
会 員 数		42名 (学内 4名 ・ 学外 38名)	
<p>○今年度の活動実績(予算執行の概略を含む)</p> <p><u>特別講演会および技術講習会の開催</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ● インフラ施設の維持管理に関する講演会の開催 (対面)、1件 <p><u>維持管理に関する技術支援</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 点検データを用いた橋梁群の劣化予測手法の提案とソフト開発 維持管理計画策定時の劣化予測手法を新たに提案, 分析ツールを提供 (通年) 鹿児島県内市町村で地域実装 ● 診断技術の高度化に関する技術支援 点群データおよび振動計測による点検診断技術開発 ● 老朽化施設の点検診断および対策等維持管理に関わる技術支援 橋梁, 雨水路等 (通年) ● 道路メンテナンス研究会 (肝付町) 橋梁の簡易的かつ低コストの補修工法及び健全度評価手法の確立に向けた連携研究 ● 温泉地域の腐食評価 ● 塩害地域の腐食評価 <p><u>研究開発に関する支援</u></p> <p>研究題目「構造物の診断技術および維持管理システムの開発とその実用化に関する研究 (平成 29 年 12 月 6 日締結～令和 12 年 9 月 30 日まで)</p> <p><u>診断技術・材料性能評価に関する支援</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 材料性能評価 (コンクリートの圧縮強度, 曲げ靱性, 塩化物イオン量, 残存膨張量など) <p style="margin-left: 40px;">活動の多くは, 現地(実構造物)の調査や計測を行うことから, 情報通信およびデータ処理のためにモバイル Wi-Fi を購入し活用させていただいた。</p> <p>○今年度の活動成果</p> <p>鹿児島県内のインフラ構造物の維持管理全般に関与し, 県内インフラの長寿命化, 持続可能性を目指した活動を継続することができた。</p> <p>また, 活動の多くは, 県内外の土木技術者・研究者と連携し技術支援等を行うため, 維持管理等業務に関わる土木技術者の育成にもつながった。</p> <p>○次年度の目標</p> <p>通年で実施している支援等については, 今後も継続して行う。</p> <p>新たに自治体と包括連携協定を結び, 社会に貢献できる研究会を目指す。</p>			

令和7年度 DXコネクセンター所管研究会活動報告書

研究会の名称	加工計測 IoT 研究会		
代表者	氏名	熊澤 典良	
	所属	理工学研究科 機械工学プログラム	
設置領域	地域創生・安全工学		
会 員 数	10名 (学内 3名・学外 7名)		
<p>○今年度の活動実績(予算執行の概略を含む)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● IoT 実証ラボ・施設見学 <ul style="list-style-type: none"> ◇ R8年1月27日(火)16:30～17:00,13名(奄美群島各市町村・NPO 法人奄美野鳥の会・奄美分室特任研究員等9名, 大学内教職員4名) ● 受託研究 <ul style="list-style-type: none"> ◇ 茶園ロボット監視システム, 研究期間: 2025年5月1日～2026年3月31日 ◇ 防霜散水器 LPWA 追加機能, 研究期間: 2025年9月1日～2026年2月28日 ● 予算執行の概略 <ul style="list-style-type: none"> ◇ IoT 実証ラボで使用する機器(記録媒体・センサ等)の修理交換を行った. ◇ 新しく相談のあった IoT 関連事業に関して, センサ・デバイス等を購入して試作を行った <p>○今年度の活動成果</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 学会発表 <ul style="list-style-type: none"> ◇ 東梅晃大, 熊澤典良, 田淵大介, 上谷俊平, 複合現実技術による建物内人数可視化システム, CIEC 2025 PC カンファレンス講演論文集, pp.236-239, 2025 ◇ 堀垂由美, 熊澤典良, 島義弘, 田淵大介, 上谷俊平, 集中度評価のための無線通信を用いた IMU による幼児の頭部姿勢計測, CIEC 2025 PC カンファレンス講演論文集, pp.240-243, 2025 <p>○次年度の目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ● IoT に関連する受託研究での地域貢献 <ul style="list-style-type: none"> ◇ 奄美大島におけるサトウキビの栽培・収穫に関する事業に関して, 研究を加速する. ◇ IoT およびロボット技術の適用により, 鹿児島県における茶生産に貢献する. 			

令和7年度 DX コネクトセンター所管研究会活動報告書

研究会の名称	鹿児島版地盤情報データベース研究会		
代表者	氏名	酒匂 一成	
	所属	理工学研究科 海洋土木工学プログラム	
設置領域	地域創生・安全工学		
会員数		6名（学内 3名・学外 3名）	
<p>○今年度の活動実績(予算執行の概略を含む)</p> <p>本年度は、「鹿児島版地盤情報データベース」の防災分野における工学的活用に向けた検討を行った。これまで収集したボーリングデータを活用した三次元地盤モデルの作成やボーリングデータを活用した地盤工学の設計等で必要となるパラメータの分布状況などについて検討を行った。また、鹿児島市地盤図に基づいた講演を鹿児島県内の地盤工学技術者ら向けに5回実施して、鹿児島市平野部の地盤について意見交換を行った。</p> <p>今年度の予算執行については、上記の活動を実施するために必要な印刷費、学生のアルバイト費、データ保存用のHDD等に使用した。</p> <p>○今年度の活動成果</p> <p>今年度の活動成果について、以下にまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これまで収集したボーリングデータを活用した三次元地盤モデルの作成 ・ボーリングデータを活用した地盤工学の設計等で必要となるパラメータの分布状況 ・鹿児島県土木部、鹿児島県建設技術センター、鹿児島県地質調査業協会との連携を図り、鹿児島県内のボーリングデータ活用法について意見交換。 ・鹿児島県地震等災害被害予測調査検討有識者会議における検討用情報として、データベースが活用された。 <p>○次年度の目標</p> <p>今年度の活動をベースとして、内容の高度化を目指す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・三次元地盤モデルの作成。 ・ボーリングデータで得られるN値から地盤工学の設計等で必要となるパラメータを推定し、その分布状況を把握。 ・鹿児島県土木部、鹿児島県建設技術センター、鹿児島県地質調査業協会との連携を図り、鹿児島県内のボーリングデータ活用法について意見交換。 ・鹿児島県地震等災害被害予測調査検討有識者会議への情報提供。 			

令和 7 年度 DX コネクトセンター所管研究会活動報告書

研究会の名称	火山ガラス微粉末の社会実装に向けた研究会		
代表者	氏名	山口 明伸	
	所属	理工学研究科 海洋土木工学プログラム	
設置領域	地域創生・安全工学		
会員数	9名（学内 3名・学外 6名）		
<p>○今年度の活動実績(予算執行の概略を含む)</p> <p>鹿児島大学、東京大学、鹿児島県、株式会社プリンスの産官学による研究チームにおいて、火山ガラス微粉末(以下 VGP)をコンクリート用結合材あるいは細骨材として使用した場合の反応特性、強度特性、耐久性等について実験的に検討するとともに、社会実装に向けた取り組みを実施した。また、下記の会議において、産官学における今年度の取り組みに関する協議を行った。</p> <p style="margin-left: 20px;">第2回「VGPの社会実装に向けた研究会」</p> <p style="margin-left: 40px;">日時:令和 8 年 1 月 29 日 10:30～12:00</p> <p style="margin-left: 40px;">場所:東京大学工学部 1 号館</p> <p style="margin-left: 40px;">参加者:東京大学(野口、丸山)、京都大学(友寄)、鹿児島大学(山口、審良、川上) 鹿児島県(朝倉、中村、福迫、池上、袖山、樋口) (株)プリンス(佐々倉)、DAIKEN(株)(竹原、宮村、清水)</p> <p>○今年度の活動成果</p> <p>本年度の検討により、以下の成果を得た。</p> <p>(1)強度特性:VGP 混和により、初期強度の低下が確認されるが、早強セメントと併用することで、改善が図れる。また、長期強度は、セメント種類にかかわらず通常よりも向上する。</p> <p>(2)耐久性:VGP 混和により、塩化物イオンの浸透抵抗性が向上する。また、シラスとの併用により、さらなる向上が期待できる。</p> <p>(3)水和反応:VGP の化学反応特性を、経時的な反応率、SEM 観察、元素組成分布分析、Ca/Si 等の観点から分析し、VGP の反応メカニズム、強度発現メカニズムの一端を明らかにした。</p> <p>(4)社会実装:鹿児島県のモデル工事として、道路のり面、駐輪場、落蓋側溝、大型コンクリート積ブロックへの適用がなされた。また、事業化のための課題として、関連 JIS の改正や CO₂ 排出削減材料としての価値を含めた市場浸透を図る必要があることが確認された。</p> <p>○次年度の目標</p> <p>VGP の社会実装促進のために、産官学による検討を引き続き継続する。各機関における具体的な活動目標については、次年度 5 月の会議で改めて協議する。</p>			

令和7年度 DX コネクトセンター所管研究会活動報告書

研究会の名称	ライフサイクルハウス研究会		
代表者	氏名	鷹野 敦	
	所属	理工学研究科 建築学プログラム	
設置領域	環境・エネルギー		
会 員 数		8名 (学内 3名 ・ 学外 5名)	
<p>○今年度の活動実績(予算執行の概略を含む)</p> <p>本研究会で開発を行ってきた木質構法を用いた、既存住宅内設置型の耐震シェルターの開発を開始した。既存住宅の間取りに柔軟に対応できるように構法システムを整理し、耐久性及び安全性の検証を行う載荷実験の計画を策定した。また、本構法を普及するための実大部分模型の作成を行った。予算は模型製作の消耗品費に用いた。</p> <p>○今年度の活動成果</p> <p>基準のない動的な載荷実験について、既往研究等の調査を行い、妥当な結果の評価と発信を行うための実験計画を策定した。また、本構法の魅力を発信する実大部分模型を製作した。</p> <p>○次年度の目標</p> <p>今年度に作成した実験計画をもとに、来年度、鹿児島大学内および県からの補助金申請を行い、実験を実施する。実験は県工業技術センターでの実施を予定している。</p>			

令和7年度 DX コネクトセンター所管研究会活動報告書

研究会の名称		資源リサイクル研究開発研究会
代表者	氏名	加藤 太一郎
	所属	理工学研究科 化学プログラム
設置領域		環境・エネルギー
会 員 数		12名 (学内 10名 ・ 学外 2名)
<p>○今年度の活動実績</p> <p>2025 年度第 1 回資源リサイクル研究開発セミナー 日時：2025 年 11 月 28 日(金) 14:00～15:00 場所：鹿児島大学理学部 1 号館 101 室 講師：環境コンサルタント・三井化学株式会社 ESG 推進室アドバイザー ・川島信之様 演題：サーキュラーエコノミーの本格社会実装に向けた本質的な課題 ～ポリ乳酸事業開発の経験から～</p> <p>2025 年度第 2 回資源リサイクル研究開発セミナー 日時：2026 年 1 月 15 日(木) 16:30～17:30 場所：鹿児島大学理学部 3 号館 2 階 321 室 講師：東京大学・准教授・土屋康佑先生 演題：環境にやさしい酵素反応を駆使した循環型材料の創製</p> <p>○今年度の活動成果</p> <p>設置 2 年目の研究会である。初年度に引き続いて、化学・バイオの力をどのように資源リサイクル研究に活かせるかを議論する勉強会を 2025 年 11 月と 2026 年 1 月に開催した。学内外の産官学民の研究者から広く参加者を募りフランクな学術的対話を繰り返すことで最新の資源循環研究に関する情報収取を進めると共に、南九州地域内で発生する素材の再資源化研究に取り掛かる際の課題の抽出と学術的貢献の可能性について情報交換を行った。また、来年度からの本格始動に向けて、薩摩川内市のサーキュラーエコノミー実証事業拠点であるサーキュラーパーク九州(CPQ) に併設された鹿児島大学サテライトラボの整備を行った。</p> <p>○次年度の目標</p> <p>CPQ サテライトラボにてプラスチック素材の資源循環に向けた検証実験を 5 月の GW 明けから本格的に開始する。理工学研究科理学専攻化学プログラム生化学講座内に開設した「資源リサイクル研究交流オープンラボ(OpeLaR)」や、長崎大学、宮崎大学との連携 PJ である J-PEAKS 事業と連携を密に取りながら、国内外の産官学民組織からナイロンを中心としたプラスチックの資源循環に関わる研究者を鹿児島に呼び込み交流することで、社会実装に向けた研究会メンバーの研究環境・意識を高めていく。</p>		

令和7年度 DXコネクセンター所管研究会活動報告書

研究会の名称		食品加工開拓研究会
代表者	氏名	武井 孝行
	所属	理工学研究科 化学工学プログラム
設置領域		先端物質材料開発
会 員 数		16名 (学内 9名・学外 7名)
<p>○今年度の活動実績(予算執行の概略を含む)</p> <p>2026年2月20日に、鹿児島大学 郡元キャンパス 産学交流プラザ 2F セミナー室において、第8回食品加工開拓研究会講演会を開催した。講演者は2名で、2件の講演が行われた。参加者は講演者を合わせて20名であった。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「つくり手と飲み手を繋ぐ」焼酎ブランド LINK SPIRITS 株式会社 代表取締役 富永 咲 氏 2. 漁業現場から生まれた挑戦 ～水産物流通における情報プラットフォーム構築～ 株式会社 ZIFISH 代表取締役 江幡 恵吾 氏 <p>○今年度の活動成果</p> <p>本研究会では、食品のものづくり技術の開発・改良、あるいはそれにつながる可能性のある新情報を提供している。</p> <p>LINK SPIRITS 株式会社 代表取締役 富永 咲 氏からは、焼酎の商品紹介に加え、木樽蒸留器を用いて本格焼酎を造る作り手の現状や、焼酎の魅力を発信する活動、さらに焼酎の歴史について紹介があった。</p> <p>株式会社 ZIFISH 代表取締役 江幡 恵吾 氏からは、日本の水産業が抱える現状と課題について解説があり、その解決策として、水産物流通 OS(情報基盤)の整備と、水揚げ物の計量・伝票作成を担うスマート計量システムの開発が紹介された。また、このシステムが鹿児島県・高山漁協で実用化されていることも紹介があった。</p> <p>これらの2つの講演の視聴により、食品に関係する参加者の新たな研究の展開や新たな共同研究のスタートに繋がることが期待された。</p> <p>○次年度の目標</p> <p>本年度と同様に講演会を開催することで、食品のものづくり技術の開発・改良、あるいはそれにつながる可能性のある新情報を提供する。</p>		

令和7年度 DX コネクトセンター所管研究会活動報告書

研究会の名称	鹿児島ハイブリッドロケット研究会		
代表者	氏名	片野田 洋	
	所属	理工学研究科 機械工学プログラム	
設置領域	天文学宇宙		
会員数		55名（学内 27名・学外 28名）	
<p>○今年度の活動実績(予算執行の概略を含む)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) ハイブリッドロケットエンジン内の熱流動シミュレーションを行い、得られた成果をエンジン設計にフィードバックした。 2) 鹿児島ロケット6号機, 7号機の打上げ実験を今年度から南種子町で実施すべく, 関係各所(南種子町役場, 南種子町漁協, 南種子町住民, 鹿児島県庁, 熊毛地区消防組合, 種子島警察署, 第十管区海上保安本部, 関西空港, 海上自衛隊鹿屋航空基地)と調整を行った。鹿児島ロケット6号機, 7号機打上げ実験の運営に関するワーキンググループ会議を6回実施した。 3) 鹿児島ロケット6号機, 7号機の報道機関向け機体公開を行った。 4) 鹿児島ロケット6号機には楠隼高校の生徒が開発した缶サットを搭載した。 5) 鹿児島ロケット6号機, 7号機の打上げ実験を南種子町宇宙開発推進協力会との共催により前之浜海岸で実施した。地元小学生との交流会も実施した。 6) 鹿児島県と共催で, 「学生向け宇宙ビジネス講座」を稲盛会館で実施した。 7) 鹿児島県主催の「かごしまスペースフェスタ 2025」に出展した。ワークショップも実施した。 <p>○今年度の活動成果</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 鹿児島ロケット7号機の機体開発の一環として, パラシュート放出機構と電装部の振動試験を鹿児島県工業技術センターで実施した。いずれも, 正常に動作することを確認した。 2) 鹿児島ロケット7号機のパートナー企業5社を獲得した。 3) 南種子町での射点開拓に成功し, 現地での打上げ実験運営のノウハウを獲得した。また, 10時間以内での2機打上げを実現した。 4) 鹿児島ロケット6号機は上空で設計通りパラシュートが開傘し, 全機回収に成功した。7号機は目視の飛行軌道は概ね正常であった。現在, 飛行データを解析中である。 5) 水産学部練習船「南星丸」との連携により, 海上での機体回収に成功した。 6) 鹿児島ロケットに関する本年度の報道は, 確認できた範囲で20件であった。 <p>○次年度の目標</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 鹿児島ロケット8号機, 9号機の開発と令和8年度内の打上げを南種子町で実施する。 2) 将来, JAXA 種子島宇宙センター内からの鹿児島ロケット打上げを実現するため, 同センター所長及び安全管理責任者と定期的に打合せを実施する。 			

(3) 海×島 SDGs 推進プロジェクト

事業名：地域ビッグデータを活用した、水産・海洋産業のスマート化と島嶼部での再エネ高効率利用に関する研究（海×島 SDGs 推進プロジェクト）

実施場所：鹿児島大学および鹿児島県内の事業対象区域

学内研究者：理工学研究科、工学部、水産学部、法文学部

事業概要：本事業は鹿児島大学の SDGs の取り組みの一環として実施するもので、本大学の強みである「統合知」と「鹿児島地域版ビッグデータ」を活用することにより、【A】鹿児島県の水産・海洋産業の事業強化と新規事業の創出を目標にして、これらの産業のスマート化を推進するシステムの開発や、【B】鹿児島県島嶼部における農林水産業の高度化を促進するための、地域資源としての再生可能エネルギーを最大限利用するシステムの開発、【C】SDGs で言及されている海洋プラスチックごみの合理的な処理・処分の実現に向けて、鹿児島県海岸におけるプラごみ監視システムの開発等を推進する。

以下に、2025 年度の活動内容を示す。

1-1) ミッション実現戦略分関連の活動状況（島嶼研との合同活動）

- ・2025 年 05 月 12 日 ミッション実現戦略分事業連絡会議開催
- ・2025 年 07 月 03 日 ミッション実現戦略分事業運営委員会開催
- ・2025 年 10 月 15 日 ミッション実現戦略分事業に係る社会的インパクト調書の提出
- ・2025 年 11 月 17 日 ミッション実現戦略事業に係る社会的インパクトの中間評価に向けたヒアリング（評価結果：2.5、予算 1 割削減の上で継続）
- ・2026 年 01 月 27 日～28 日 鹿児島大学ワークショップ開催
場所：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター
参加者：26 名（内訳：大学側：国際島嶼教育研究センター長、理工学研究科長ほか 15 名、奄美側：徳之島虹の会、奄美博物館、龍郷町企画観光課、宇検村教育委員会、天城町企画財政課、NPO 法人奄美野鳥の会、瀬戸内町総務企画課、奄美分室特任研究員以上 9 名）
プログラム内容：大学紹介、キャンパス見学、大学およびミッション実現戦略分事業の活動報告、意見交換会など
- ・2026 年 02 月 14 日 全学プロジェクト・ミッション実現戦略分シンポジウム開催
題目：奄美群島を中心とした「生物と文化の多様性保全」と「地方創生」の革新的融合モデル
会場：鹿児島大学奄美分室（紬会館 6F）
主催：国際島嶼教育研究センター、大学院理工学研究科 DX コネクトセンター、後援：奄美市
参加者：103 名（現地参加 53 名、オンライン参加 50 名）
講演件数：7 件（招待講演 1 件含む）

1-2) 各事業の活動状況

1-2-1) 事業 [A] 鹿児島県の水産・海洋産業に関する活動

1-2-1-1) 流れ藻・モジャコ来遊予測に関する活動

- ①2025 年 04 月～ スマート化支援ツール（流れ藻マップ・流れ藻予測モデル・流れ藻人工衛星画像）公開継続
- ②流れ藻観測（2 回）
 - ・2025 年 02 月 14 日～19 日 北部薩南海域における流れ藻観測（南星丸）
 - ・2025 年 03 月 17 日～23 日 北部薩南海域における流れ藻観測（南星丸）
- ③支援ツールの紹介と漁業者への普及（9 回）
 - ・2025 年 07 月 30 日 種子島漁業協同組合
 - ・2025 年 07 月 30 日 南種子町漁業協同組合
 - ・2025 年 09 月 16 日 牛根漁業協同組合
 - ・2025 年 09 月 16 日 桜島養魚

- ・2025年09月16日 垂水漁業協同組合
- ・2025年11月22日 山川町漁業協同組合
- ・2025年12月22日 種子島漁業協同組合
- ・2025年12月22日 南種子町協同組合
- ・2026年02月19日 モジャコ生産協議会
- ④支援ツール開発のための会議・協議（3回）
- ・2025年10月14日 スマート漁業技術会議
（水産学部・理工学研究科・広島大学・水産技術開発センター・水産振興課）
- ・2025年12月26日 スマート漁業技術会議
（水産学部・理工学研究科・水産技術開発センター・水産振興課）
- ・2026年03月13日 スマート漁業推進会議
（水産学部・理工学研究科・水産技術開発センター・水産振興課）

1-2-1-2) 海況予測の Web 配信（3 海域）と現場海洋観測データの収集活動（9 地点）

- ・2025年04月～ 南西諸島周辺海域における海況予報（DR_Ep）の Web 配信継続
- ・2025年04月～ 鹿児島湾周辺海域の海況予測（KB モデル）の Web 配信継続
- ・2025年09月～ 志布志湾周辺海域の海況予報（SB モデル）の Web 配信開始
- ・2025年04月～ スマート CTD を活用した水温・塩分観測の継続（東串良漁協、与論町漁協、奄美漁協、江口漁協、川内市漁協、喜界島漁協、鹿児島市漁協、内之浦漁協）
- ・2025年05月30日～07月11日 鹿児島湾根占沖の水温・塩分観測

1-2-1-3) 市場業務のデジタル化に関する活動（7 地点）

- ・2025年05月02日 国立研究開発法人水産研究・教育機構水産技術研究所上浦庁舎において、市場業務デジタル化プロトタイプ調査
- ・2025年11月～ 高山漁協において市場業務デジタル化を実装
- ・2025年11月21日 ASEAN 国際会議（バンコク）で市場業務デジタル化プロトタイプ調査
- ・2025年11月27日 タイ国プーケット漁港で市場業務デジタル化プロトタイプ調査
- ・2025年12月12日 鹿児島県漁業協同組合連合会で市場業務デジタル化プロトタイプ調査
- ・2025年12月22日 鹿児島市魚類市場・(有)山実水産で市場業務デジタル化プロトタイプ調査
- ・2025年12月24日 NIKKEI ブルーオーシャン大賞、生物多様性部門賞に係る学長への受賞報告
- ・2026年01月21日～23日 三重外湾漁業協同組合で市場業務デジタル化プロトタイプ調査
- ・2026年02月06日 研究成果の定例記者発表（鹿児島大学事務局特別会議室にて）

1-2-2) 事業 [B] 鹿児島県島嶼部における再エネ利用に関する活動

- ・2025年04月07日～08日 瀬戸内町実証実験に関する調査
- ・2025年05月01日～02日 瀬戸内町での小型 EV モビリティ導入に関する包括連携締結式
- ・2025年05月19日～20日 瀬戸内町での再エネ利用可能性調査
- ・2025年05月31日 瀬戸内町電動モビリティ現状調査
- ・2025年06月09日 薩摩川内市甕島での移動手段に関する調査
- ・2025年06月16日 瀬戸内町電動モビリティ現状調査
- ・2025年07月15日 瀬戸内町電動モビリティ現状調査
- ・2025年08月23日～25日 EV モーターズ・ジャパンでの EV バス調査
- ・2025年09月02日 瀬戸内町電動モビリティ現状調査
- ・2025年11月01日～05日 十島村宝島での電動モビリティ等設備の稼働状況確認と島嶼再エネモデル検討
- ・2025年11月26日～28日 奄美群島におけるエネルギー政策調査
- ・2025年12月03日～04日 瀬戸内町での EV バス導入可能性調査
- ・2026年01月19日～20日 瀬戸内町での EV バス導入

1-2-3) 事業 [C] 日本および世界の海洋漂着ごみに関する活動

- ・2025年02月～ 海岸漂着ごみ定量化サービス「BeachLISA」の提供開始
- ・2025年04月～ スマホアプリ「Pirika」+AIによる街中ごみ可視化サービスの継続
- ・2025年04月～ ウェブカメラを用いた海岸ごみモニタリングのWeb配信継続
- ・2025年04月～ メディア（さんいん中央テレビ）を通じたアウトリーチ活動の継続
- ・2025年09月 タイにてダンピングサイトのスペクトルカメラを用いたモニタリングを実施
- ・2025年02月 タイ及びマレーシアでプラごみに関する現地調査を実施
- ・2026年03月 奄美大島においてスペクトルカメラを用いた森林観測を実施

1-3) 各事業の活動成果（白書掲載、Web サイト開設、ガイドライン作成、論文・学会発表など）

1-3-1) 事業 [A] 関連の活動成果

① 白書掲載（1件）

- ・2025年06月06日 「令和6年度水産白書」に鹿大学発スマート水産業技術の政策反映が掲載

② Web サイト継続・開設

- ・2025年04月～ 南西諸島周辺海域における海況予報（DR_Ep）のWeb配信
（2025年1月～9月でイベント数2.5万回の実績）
- ・2025年04月～ スマート化支援ツール公開
（過去1年間で1.3万回、漁期中に8245回のアクセスを記録）
- ・2025年04月～ 鹿児島湾および志布志湾周辺海域の海況予報のWeb配信
（イベント数1万回の実績）
- ・2025年09月～ 赤潮監視業務スマート化Web配信

③論文発表（1件）

- ・鹿児島湾でのスマート漁業に向けた高分解能海況予測システムの開発. 土木学会論文集特集号（海洋開発）81(18) 25-18019 2025年10月

④学会発表（7件）

- ・2025年07月01日 第50回海洋開発シンポジウム発表
- ・2025年09月07日～12日 日本プランクトン学会・ベントス学会合同大会発表
- ・2025年11月08日～11月14日 PICES 2026 Annual Meeting 発表
- ・2025年11月27日 日本海洋学会西南支部シンポジウム発表
- ・2025年12月06日～08日 南九州海洋生物研究会発表
- ・2025年12月23日 鹿児島県合同研究成果発表会
- ・2026年01月20日 kagoshimaD³X セミナー（主催：鹿児島県情報サービス産業協会）

1-3-2) 事業 [B] 関連の活動成果

①包括連携協定締結（1件）

- ・2025年05月 瀬戸内町との包括連携協定の締結式、EVモビリティお披露目

③ シンポジウム発表（3件）

- ・2025年10月 2025鹿児島大学奄美群島拠点シンポジウムー奄美群島の更なる発展に向けた地域連携と人財育成ー パネルディスカッション
- ・2026年1月27日 九州大学エネルギーウィーク 2026 フォーカスセッション B 再生可能エネルギー連携フォーラム発表
- ・2026年2月14日 令和7年度鹿児島大学ミッション実現戦略分プロジェクトシンポジウム奄美群島における『生物文化多様性』と『地方創生』発表

1-3-3) 事業 [C] 関連の活動成果

① ガイドライン作成（1件）

- ・2025年07月（環境省）リモートセンシング技術を用いた海洋ごみモニタリングの手法調和ガイドライン改訂版 Ver.2（国内版、国際版）を作成

② 白書掲載（2件）

- ・2025年03月14日 「開発協力白書2024年度版」に鹿児島大学のタイでの技術教育支援が掲載
- ・2025年06月06日 「環境白書令和7年度版」に鹿児島大学の海洋ごみ研究と政策整合が掲載

③ Web サイト開設・継続

- ・2025年04月～ スマホアプリ「Pirika」+AIによる街中ごみ可視化サービスの継続
(日本全都道府県・世界136カ国・地域で4億件超の市民参加型実績)
- ・2025年02月～ 海岸漂着ごみ定量化サービス「BeachLISA」Webサイト開設
(公開2カ月で世界47カ国・1万件超の利用実績)
- ・2025年10月 市民と協働したごみ拾いイベントを実施し、関連webサイトを開設

④ 論文 (2件)

- ・Remote sensing and image analysis of macro-plastic litter: A review., Marine pollution bulletin222 (Pt1) 118630, 2025年9月
- ・Updating "BePLi Dataset v1: Beach Plastic Litter Dataset version 1, for instance segmentation of beach plastic litter" with 13 object classes., Data in brief61 111867 2025年8月

④ 学会発表 (4件)

- ・2025年05月25～30日 日本地球惑星科学連合 (JpGU) 2025年大会にて、
プラごみに関するセッションを開催
- ・2025年05月25～30日 日本地球惑星科学連合 (JpGU) 2025年大会発表 (件数9件)
- ・2025年09月21～25日 日本海洋学会 2025年度秋季大会発表 (件数4件)

1-3-4) そのほか

①受賞 (4件)

- ・2025年07月25日 うるるビジネスコンテスト「優秀賞」および「オーディエンス賞」受賞
- ・2025年11月08日 九州大学発ベンチャービジネスプランコンテスト「九州経済産業局長賞」
および「台日商務交流協進会 理事長賞」受賞

②招待講演 (4件)

- ・Advances in plastic litter diagnostics using remote sensing platforms and image analysis. Ocean Conservation Administration 2025 Marine Debris Management Workshop (台湾海洋委員会海洋保育署主催), 2025年9月
- ・Remote sensing and image analysis of macro-plastic litter. Ocean Plastic pollution in Thailand; current knowledge on sources, transport, and fate, バンコク, 2025年8月
- ・Advances in plastic litter diagnostics using remote sensing platforms and image analysis. 第6回日中海洋ごみ協力専門家対話プラットフォーム会合及び第6回日中海洋ごみワークショップ環境省, 2025年7月
- ・衛星による海洋ゴミのモニタリング戦略, Japanese Geoscience Union Meeting 2025, 2025年5月

(4) コトづくり支援ラボ活動報告

大学院理工学研究科 DXコネクタセンター コトづくり支援ラボは、4名の技術部職員で運営を担当しており、機械工作実習の指導補助や卒論・修論に携わる学生への技術相談対応などの教育支援業務および実験装置部品や試験片等の受託加工などの技術支援業務、この2つを大きな柱とした学内向けの支援業務を主に行っている。

運営担当技術職員それぞれの専門性を活かし、理工学研究科だけではなく学内全域、さらには地域活性化のための共同研究等の技術支援にも対応し、大学におけるものづくりの拠点としての認知度も高く、広く活用されている。

・教育部門

① 利用申請（学生は研究室単位、職員は個人での受付）

受付件数：42件 登録者数 177名

② 安全講習

設備等利用に際して必要となる安全講習を新規利用希望者対象に行っている。本年度の受講者数は以下のとおり。

講習件数：14件 受講者数：153名

③ 実習等の指導補助

1. 先進工学科機械工学 PG「機械工作実習 A&B」 前・後期 各 15回 受講者数：96名
2. 教育学部講義「技術概論」工場見学 4/23（水） 2限目 受講者：15名
3. 理学部理学科物理・宇宙 PG「物理計測実験」工場実習
6/13（金）、6/20（金）、6/27（金）、7/4（金） 全4回 受講者数：44名

④ 施設利用関係

1. 先進工学科機械工学 PG「創造機械設計」 期間：5/21～7/16 水曜 1～3限目
2. 理工技術部 公開講座「ものづくり体験教室 2025」 8/6（水） 終日
3. 建築学科「建築設計 I・II」 期間：1/7～1/14
水・木曜 3～5限目

⑤ 外部機関への協力

1. 鹿児島大学キャンパスワークショップにおけるコトづくり支援ラボの見学に対応
ラボ内の施設について紹介・説明。1/27

・開発部門

作業依頼実績

受託件数：75件

（工学系 70件、理学系 4件、農学部 1件）

完了件数*：76件 *令和6年度からの持越分 6件を含む

（工学系 71件、理学系 4件、農学部 1件）

以下に過去の加工依頼件数、月の加工時間の内訳を示す。

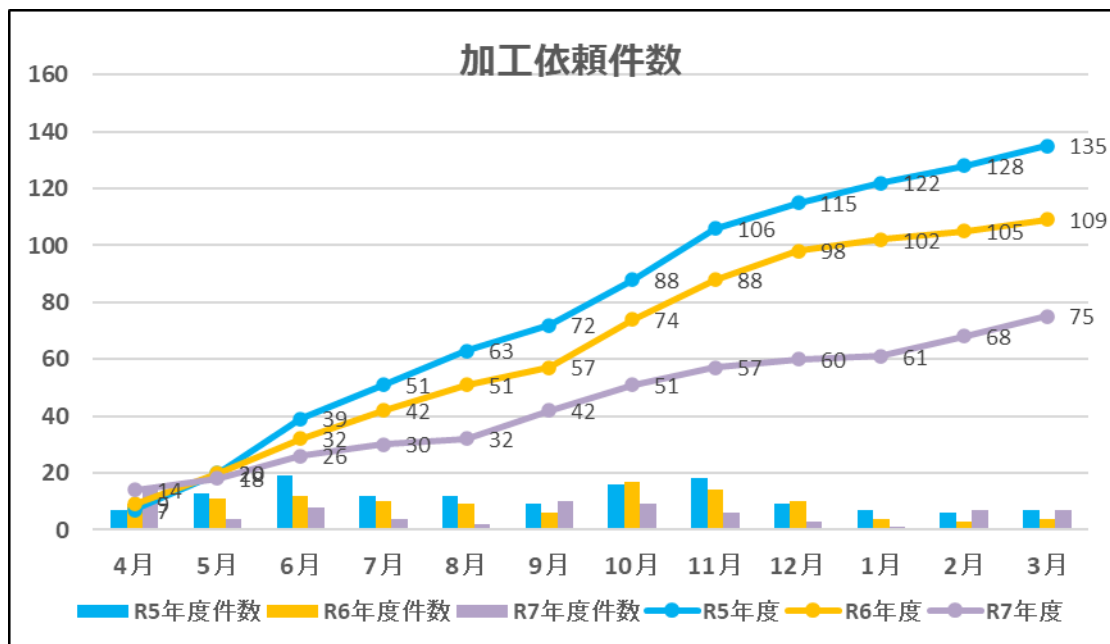


図 1. 加工依頼月毎推移

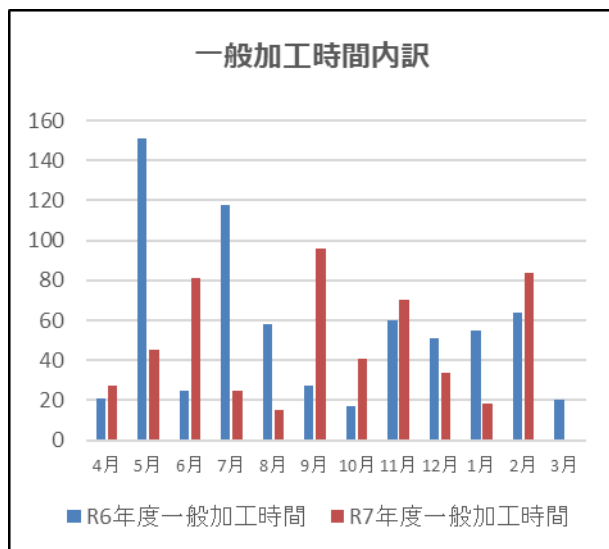


図 2. 一般加工時間月毎推移

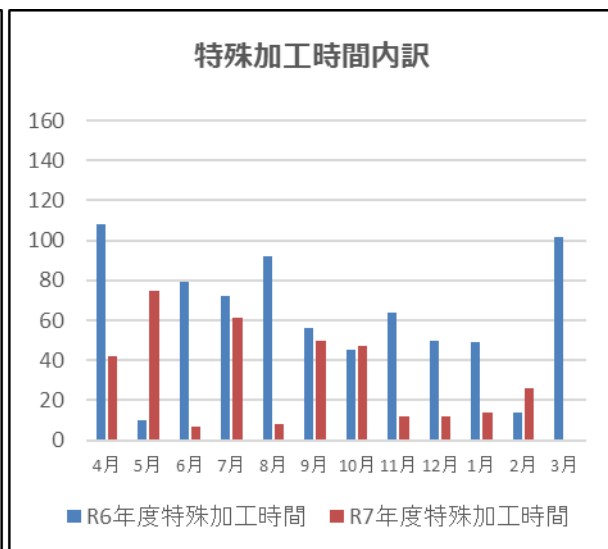


図 3. 特殊加工時間月毎推移

・災害・トラブルなど

年間を通して、大きな事故やケガはなかった。

2.4 DXタスクフォース

デジタルトランスフォーメーション（DX）を取り巻く環境の急速な変化など、喫緊の課題に迅速かつ柔軟に対応するため、DXタスクフォースは、必要に応じて設置する特別編成チームとして位置付けられている。

(1) 半導体人材育成タスクフォース（半導体人材育成理工学センターの活動）

①「半導体人材育成理工学センター」設立

令和7年7月1日、本学理工学研究科は、南九州における半導体関連の教育研究拠点を形成し、九州全体の産学官連携による人材育成を推進することを目的とした「半導体人材育成理工学センター」を設置した。本学は、文部科学省「enSET(半導体人材育成拠点形成事業)」事業に採択され、「連携校」として参画している。

②半導体実習設備「SARF-Kagoshima」の設置

実践的なものづくり教育の拠点となる半導体実習設備は、理工系総合研究棟1階に設置した。理工系総合研究棟6階の先端科学研究推進センター（共用機器分析設備）との連携も可能となる。



半導体人材育成理工学センターホームページ

③半導体バスツアー開催支援

2025年7月29日（火）・30日（水）、鹿児島県主催、DXコネクトセンター協力のもと、小中学生と保護者を対象とした「半導体魅力体験バスツアー'25」を開催した。

両日併せて30組60名が参加し、本学電気電子工学棟にて青野祐美教授より半導体デバイスについての基礎講義の後、前島圭剛准教授および技術部職員の指導のもと、実際に集積回路を用いた赤外線センサー製作に挑戦した。

参加者は保護者と協力しながら、半導体など細かい部品を丁寧に基盤に差し込み、回路を完成させた。上手く回路を繋げ、LEDライトが光ると、児童・生徒たちは大きな喜びと達成感を味わい、半導体技術への興味を深める貴重な体験となったようだ。



青野教授による基礎講義



前島准教授および技術部職員との赤外線センサー作成

④活動内容

推進のための活動を以下に示す。

九州半導体人材育成等コンソーシアム	
2025年7月23日(水)	人材育成WG 第1回会合
2025年9月19日(金)	人材育成WG 第2回会合
2025年10月17日(金)	第7回会合
2026年1月21日(水)	教育機関向け研修会
2026年3月4日(水)	人材育成WG 第3回会合
2026年3月19日(木)	第8回会合
その他	
2025年7月29日(火)30(水)	半導体バスツアー
2025年8月26日(火)	2025 IEEE 高校生イベント(国際会議)
2025年8月28日(木)	かごしま半導体関連産業共創協議会設立総会
2025年11月26日(水)	大分県 LSI クラスタ形成推進会議 20周年記念フォーラム
2025年12月23日(火)	未来を動かす！鹿児島県の技術・研究の力2025 ～試験研究機関・大学・高専合同研究発表会～
2026年2月16日(月)	かごしま半導体関連産業共創協議会 第1回総会
2026年3月17日(火)	佐世保工業高等専門学校半導体人材育成センター開所式
2026年3月25日(水)	担い手確保支援事業 企画意見交換会

2.5 DXコネクトセンター協議会

本協議会は、当センターが運営する連携組織であり、地域活性化に向けたDX情報人材の育成やイノベーションの創出を主とした目的として設置されている。本組織は、県内のDX分野に関わる企業や関係機関から構成されており、センターの取組に助言・協力を行い、また個別の意見交換や訪問等を通じて連携を図っている。

【参画機関】※50音順、2026年3月現在

[企業] 株式会社鹿児島銀行、京セラ株式会社、株式会社新日本科学、GMOペパボ株式会社、ソニーセミコンダクタマニュファクチャリング株式会社、株式会社トヨタ車体研究所、株式会社マルマエ、リコーITソリューションズ株式会社、株式会社リリー

[地方自治体] 鹿児島県、鹿児島市

[教育機関] 学外機関：第一工科大学、鹿児島純心大学、鹿児島工業高等専門学校
学内施設：情報基盤統括センター、共通教育センター

【活動実績】

2025年7～9月：センター長および特任専門員による参画企業への訪問、面談、意見交換

2025年8月6日：株式会社トヨタ車体研究所による本学学生・教職員向け企業説明会

2026年2月10日：本センター主催シンポジウムへの支援・協力

2026年3月9日：2025年度第1回協議会を対面およびオンラインにて同時開催



写真. 協議会の様子

2.6 産学官連携事業

(1) 令和7年度鹿児島大学シンポジウム

「奄美群島を中心とした『生物と文化の多様性保全』と『地方創生』の革新的融合モデル」報告書

【開催日】 令和8年2月14日(土)13時00分-17時00分

【会 場】 鹿児島大学奄美分室（奄美市名瀬町紬会館）およびオンライン

【主 催】 鹿児島大学ミッション実現戦略分プロジェクト「奄美群島を中心とした『生物と文化の多様性保全』と『地方創生』の革新的融合モデル」（国際島嶼教育研究センター・理工学研究科DXコネクセントセンター）

【参加者】 103名(会場53名、オンライン50名)



橋口・研究・情報担当理事の挨拶
(ビデオメッセージ)

鹿児島大学ミッション実現戦略分「奄美群島を中心とした『生物と文化の多様性保全』と『地方創生』の革新的融合モデル」事業の成果発表の一環として、奄美大島においてシンポジウムを開催しました。本シンポジウムは、国際島嶼教育研究センター（以下、島嶼研）および理工学研究科DXコネクセントセンター（以下、理工研）が主催し、奄美市が後援したものです。



大塚・国際島嶼教育研究センター長の趣旨説明

本ミッションは、島嶼研と理工研が主体となって推進する全学的プロジェクトであり、理工研においては、DXコネクセントセンターのSDGs推進事業の一つである「海×島SDGs推進プロジェクト」と密接に関連しています。

シンポジウムでは、橋口照人・筆頭理事による挨拶（ビデオメッセージ）、大塚靖・国際島嶼教育研究センター長による趣旨説明に続き、前半のセッションとして多様性保全部会の発表が行われました。北之坊誠也・島嶼研特任研究員による「サンゴ繁殖から見える奄美の自然環境」、山本智子・水産学部教授による「陸と海をつなぐ生物たち」、大塚靖・島嶼研教授による「奄美群島のブユー自然の一部としての害虫」、志水勝好・農学部教授による「奄美大島の植物のミステリー ～おまえはなぜ生きられる？～」の4題が発表されました。



小山・理工学研究科 DX コネクセントセンター長の閉会挨拶

後半のセッションでは、木下英二・DXコネクセントセンター／先端研究・地域連携部門長が司会を務め、理工研を中心とする地方創生部会から3題の発表が行われました。江幡恵吾・水産学部准教授による「産地魚類市場スマート計量システムによる水産DXの実現」、市川英孝・法文学部教授による「地域資源を活用した持続可能なまちづくりー瀬戸内町での取組みー」、高橋幸弘・北海道大学大学院理学研究院教授による招待講演「超小型衛星で迫る

奄美の秘密」が発表されました。

講演後には、高校生や自治体の方々から温かい感想が寄せられ、シンポジウムは終始和やかな雰囲気の中で盛況のうちに幕を閉じました。また、会場参加者にはアンケートへの回答を依頼し、その結果は総じて非常に高い評価となりました。さらに、本シンポジウムの様子は、2月15日付の奄美新聞（9面）と2月16日付の南海日日新聞（1面）に大きく取り上げられ、当日の盛況ぶりが広く伝えられました。



国立大学法人
鹿児島大学
KAGOSHIMA UNIVERSITY

令和7年度 鹿児島大学シンポジウム

奄美群島における「生物文化多様性」と「地方創生」

主催：鹿児島大学ミッション実現戦略分プロジェクト
「奄美群島を中心とした『生物と文化の多様性保全』と『地方創生』の革新的融合モデル」
(国際島嶼教育研究センター・理工学研究科DXコネクトセンター)
後援：奄美市

令和8年2月14日(土)13:00～17:00

会場：鹿児島大学奄美分室(袖会館6F)

※駐車場の台数に限りがあります。できるだけ、公共交通機関を利用してお願いします。



鹿児島大学公式
マスコットキャラクターさつっん

オンラインでも参加できます

参加無料／事前申込制

橋口 照人 開会挨拶
鹿児島大学筆頭理事(研究・情報担当)

大塚 靖 趣旨説明
鹿児島大学国際島嶼教育研究センター長

北之坊 誠也 サンゴ繁殖から見える奄美の自然環境
鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

山本 智子 陸と海をつなぐ生物たち
鹿児島大学水産学部

大塚 靖 奄美群島のブユー—自然の一部としての害虫—
鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

志水 勝好 奄美大島の植物のミステリー
～おまえはなぜ生きられる?～
鹿児島大学農学部

プログラム

14:30 質疑応答
14:40 休憩(15分間程)

江幡 恵吾 産地魚類市場スマート計量システムによる水産DXの実現
鹿児島大学水産学部

市川 英孝 地域資源を活用した持続可能なまちづくり—瀬戸内町での取り組み
鹿児島大学法文学部

高橋 幸弘 超小型衛星で迫る奄美の秘密
北海道大学大学院理学研究院

16:15 質疑応答
16:25 全体ディスカッション

プログラム

小山 佳一 閉会挨拶
鹿児島大学大学院理工学研究科DXコネクトセンター長

※プログラムは変更になることもあります

お申し込み

■お申し込み期限：令和8年2月9日(月)
■右のQRまたは下記のメールアドレスからお申し込みください。

お問合せ先

■鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室
・電話：0997-69-4852
・メール：amamist@cpi.kagoshima-u.ac.jp



- 45 -

【シンポジウムの様子】



シンポジウムの風景



木下教授(理工学研究科 DX コネクテセンター)の司会



江幡准教授の発表



市川教授の発表



高橋教授の発表

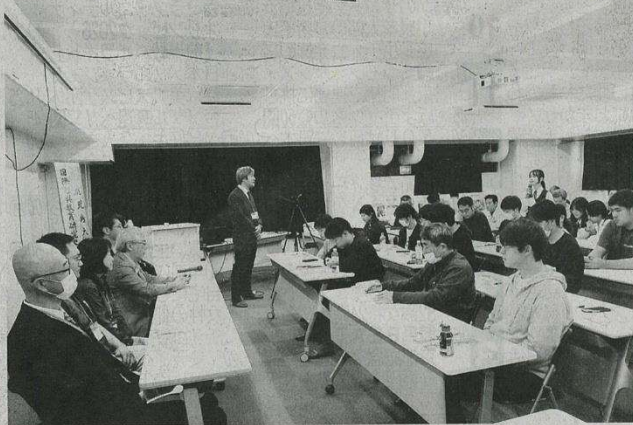


総合討論の発表風景

「奄美群島をスタートアップの拠点に」

多様性(生物・文化)と経済を融合

革新的モデル構築へ 鹿大シンポジウム



高校生も参加し行われたシンポジウム（14日、奄美市名瀬の鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室）

奄美群島の生物・文化の多様性を保全し、地域資源として持続的に活用する新たなモデルの創出を目指している「鹿児島大学ミッション実現戦略プロジェクト」が主催する2025年度シンポジウム「奄美群島における『生物文化多様性』と『地方創生』」が14日、奄美市名瀬の同大国際島嶼教育研究センター奄美分室であった。水産学・農学・経営学など多彩な分野の研究者7人が登壇し、二つのテーマを融合させた革新的モデルの構築を目指した。約100人（オンライン含む）が聴講した。

プロジェクトは、同センターと理工学研究科が主体となり、22年度から6年間かけて取り組む全学的な研究。多様性保全部会4班（陸上植物・陸上動物・水圏・地域研究）で60人以上の教員、研究者が参加、奄美群島全域で学際的な研究と人材育成を行っている。講演は2部構成。生物多様性分野では、▽ミドリイシ属サンゴの多種同調産卵（一斉産卵）におけるバンドル（精子と卵の塊）の割れ方▽エコトーン（移行帯）としてのマングローブの生態系▽吸血ブユが媒介する病原体

▽ボタンのボウフウ（長命草）の窒素固定の謎について、同大の教授らが研究発表した。地方創生分野では、同大発ベンチャー、株式会社ZIFISH（ジフイッシュ）が開発したAIスマート計量システムによる「水産物流通DX（デジタルトランスフォーメーション）」の取り組みを水産学部の江幡恵吾准教授（同社取締役CEO）が解

説。奄美大島は、海洋学、世界との共同研究。計量器に魚を載せるだけで重さなどの情報。ボックレジット（二酸化炭素の排出権取引）な。農業（食糧確保）など地球規模の課題に取り組み最適の地」と話。変動に対応した資源管理に「いすれも1兆ドルを超える市場があるとされる。奄美から地球の課題を解決できる可能性がある」と提言した。同大大学院理工学研究科の小山佳一DXコネクタセンター長は「本大学は、奄美群島をスタートアップの拠点と考えている。他大

2026年 奄美新聞 2/159 面



奄美拠点に世界へ

「生物文化多様性」地方創生テーマ

鹿大シンポジウム

奄美群島における「生物文化多様性」と「地方創生」をテーマに掲げた鹿児島大学のシンポジウムが14日、奄美市名瀬の同大学奄美分室であった。同大学と北海道大学の研究者ら7人が研究成果を発表。参加者は奄美群島の自然の豊かさを再確認するとともに、地方創生に関する実践的な発表を通し、奄美を拠点とした研究やビジネスの世界展開のイメージを具体化した。

鹿児島大学は、2022年にも50人余りが参加した「生物文化多様性」をテーマとしたシンポジウムを開催した。2部構成で、1部は生物文化多様性と「地方創生」の両方の調和による発展を目指す「ミツシヨシ」実践戦略分プロジェクト」に取り組んでいる。同シンポジウムはこれまでの研究成果の地元への還元が目的。会場、オンライン、同大国際島嶼教育研究センター1特性研究員の北之坊誠

奄美群島における「生物文化多様性」と「地方創生」をテーマに研究者らが登壇した鹿児島大学のシンポジウム14日、奄美市名瀬

2026年 2/16
南海日日新聞 (面)

地氏は、サンゴのハンドルの「種子」がハックされた（ラプセル）の硬さが種類によって異なることに着目。奄美大島でも外海に面し開放的な環境にある奄美市名瀬の大浜と、大島海峡で閉鎖的な環境にある瀬戸内町の白浜や手安といった異なる環境でのハンドルの崩壊時間を比較した。

ハンドルの割れ具合を測定した結果、閉鎖的な環境のサンゴの方が開放的な環境のものよりハンドルの割れにくいという傾向を確認。北之坊氏は「まだ説明力が弱いので、他の影響も関与している可能性がある」と付け加えた。

2部では、北海道大学大学院理学研究教授の高橋幸弘氏が「超小型衛星で見

る奄美の秘密」の演題で発表。高橋氏の研究室では50基の小型人工衛星を開発しており、世界の大型衛星を上回る性能を部分的に実現しているという。

高橋氏は、ドローンに比べ効率的に世界中を観測できる人工衛星の強みを強調。海洋プラスチックごみや森林、農業、台風分析など多様な研究に役立つとして、奄美のサトウキビ、マンクローフ、海洋ごみなどの問題に触れ、「サトウキビの塩害や病気は海外でも農業分野の大きな課題。奄美での研究が意味を持つ」とし、奄美は人工衛星を活用した世界的に重要な研究対象が豊富と訴えた。

シンポジウムを聴講した県立大島高校2年の山下幸愛さん（17）は「登壇した方の研究は最先端で世界に誇れる。奄美大島の持つ価値と資源の重要性を再認識することができ、新しい世界を知ることができた」と語った。

(2) 他組織との連携

○高等学校DX加速化推進事業（DXハイスクール）への支援

本センターでは、文部科学省「大学・高専機能強化支援事業」に選定された本学の取り組みの一環として、「高等学校DX加速化推進事業（DXハイスクール）」を支援するとともに、県内高等学校との高大連携によるDX人材育成に取り組んでいる。

今年度、DX人材育成の観点から理工学研究科および工学部が協定を締結した高等学校は以下のとおりである。

◆学校法人川島学園鹿児島実業高等学校

協定締結日：令和7年11月17日（月）

協定締結部局：大学院理工学研究科

連携内容：大学教員による特別授業・講演の実施、大学施設・設備を活用した体験学習、課題研究・高大接続教育への支援。

◆鹿児島県立工業系高等学校

（鹿児島工業高等学校、川内商工高等学校、加治木工業高等学校、隼人工業高等学校）

協定締結日：令和7年11月27日（木）

協定締結部局：工学部

連携内容：大学教員による特別授業・講演の実施、大学施設・設備の見学等、教育および高大接続に関する意見交換。

【協定締結後の取組】

令和8年2月10日に本センター主催で開催したシンポジウムにおける関連事業として、同日午前中には鹿児島実業高等学校の生徒を対象に高大接続特別授業（工学部・理学部の学部説明および基本的な物理の講義受講）を実施した。午後からは、同生徒はシンポジウムにも参加し、参加した生徒には参加証明書を、ポスター展示を行った生徒にはポスター展示証明書をそれぞれ発行した。

今年度、上記協定締結校に加え、鹿児島県教育庁とDXハイスクール事業を契機としたDX人材育成や高大接続に向けた連携の可能性について面談・意見交換を複数回実施した。

○株式会社トヨタ車体研究所との連携

令和7年8月6日、学生および教職員を対象とした企業説明会を実施した。当日は、企業概要およびDXに関する同社の取り組み、また求められる人材像等について説明が行われ、学生・教職員28名が参加した。特に同社のヒューマノイドロボット開発に関する話題には、参加者の多くが高い関心を寄せ、質疑応答では技術的な質問や今後の研究に向けた意見等、活発な意見交換が行われた。

トヨタ車体研究所
知能センター 説明会

AI
データ
ロボット サイエンス

鹿大の皆さん
集合!

トヨタ車体研究所では、今年10月に「産学連携による鹿児島大学の産学連携を実現する共同研究」を目的に、鹿児島中央大学とAMU WE Sが連携して知能センターをオープンします。鹿児島産学連携での研究を体験してみませんか？

AMU WE S KAGOSHIMA

日時:2025年8月6日(水)14:00-15:00
場所:建築学棟1号棟1階レクチャールーム
対象:学部生、大学院生、教職員の皆様
申込:Formにて
締切:8月4日(月)まで ↓申込はコチラ↓

【お問合せ】
大学院理工学研究科DXコネクタセンター
電話:099-285-7889
メール:dacc_admin@eng.kagoshima-u.ac.jp

(3) 地方自治体との包括連携協定

○理工学研究科と肝付町の包括連携協定（平成29年1月27日に締結）

◆第1回打合せ

日 時：令和7年4月18日（金）14時00分～14時30分

場 所：セミナー室（産学交流プラザ 2階）

参加者：肝付町企画調整課、肝付町教育委員会および本学DXコネクトセンター関係者

概 要：本学より、本センターが令和7年4月より本格始動し、喫緊の課題に迅速に対応する特別編成チームDXタスクフォースを新設したことを報告した。肝付町より、昨年度のYAC（日本宇宙少年団）うちのうら銀河分団の活動および宇宙産業振興のまちづくりに関する報告があった。続いて、令和7年度の活動予定について、YACうちのうら銀河分団の活動に伴う本学講師2名の派遣と、グローバル人材育成グループのGOES Homeの肝付町での実施予定について報告があった。

◆活動実績

- ・出前授業「はた！と閃く 光の実験」

日 時：令和7年6月21日（土）

場 所：内之浦銀河アリーナ（肝属郡肝付町南方289）

担 当：秦 浩起（理工学研究科理学系 准教授）

参加者：銀河分団員26名、関係者12名程



写真1. 授業の様子

- ・出前授業「作って学ぶ構造力学の世界」

日 時：令和8年2月21日（土）

場 所：内之浦銀河アリーナ（肝属郡肝付町南方289）

担 当：ボウ コーザー（理工学研究科工学系 助教）

参加者：銀河分団員11名、関係者12名程

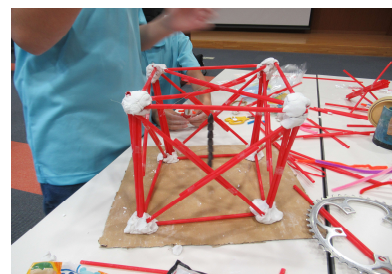


写真2. 授業で作った学生の作品

- ・グローバル人材育成グループのGOES Home

学生参加者の別授業の都合により、今年度の実施は中止となった。

3 会議報告

3.1 運営会議

本会議は、DXコネクセンターの事業運営に関する各部門の審議結果および活動内容を報告し、センター全体の事業計画や予算等を審議・承認することを目的として開催している。参加者は、センター長、各部門長、研究科長特命補佐、理工学研究科事務部長およびセンター職員である。令和7年度の実施状況を以下に示す。

○令和7年度第1回運営会議

令和7年7月24日（木） 12時50分～13時50分

【審議事項】

- ・本センター立ち上げに伴い研究科長裁量経費の当初予算額の増額が決定した。
- ・新規ホームページおよびリーフレットの作成について決定した。
- ・受託作業料および利用登録料の変動を反映したコトづくり支援ラボの予算計画を承認した。
- ・本センター主催のシンポジウムおよび国際島嶼教育研究センターとの連携で実施するシンポジウムの開催が決定した。
- ・DXタスクフォースは、「半導体人材育成タスクフォース」で始動したが、7月以降は「半導体人材育成理工学センター」が立ち上がり発展的に継承されることが説明され、事務に関しては引き続き本センターで担うことが決定した。
- ・DXコネクセンター組織規則および各部門の運営申合せについて審議を行った。組織構想に示されている各部門の業務内容について、業務内容の再整理、業務の追加の必要性、または複数部門による共同実施の在り方等について、今後精査する必要があるとされた。

【報告事項】

- ・肝付町との包括連携協定に係る活動として、今年度は本学の理工学研究科の教員による出前授業が2回あると報告があった。
- ・インターンシップ支援グループより、今年度は参加者を増やす活動を実施予定であると報告があった。
- ・グローバル人材育成グループより、海外研修の参加者減少に伴い、先取り履修ができる学部大学院一環教育を利用することを検討中であると報告があった。
- ・DX教育推進グループより、クロスアポイントメント教員の講義内容等の報告があった。
- ・数理・データサイエンス・AI教育グループより、文部科学省が推進する数理・データサイエンス・AI教育プログラムの特定校として採択されていること。また、オープンバッジは学生にデザインを募りその中から選出することの報告があった。
- ・DXタスクフォースより、半導体人材育成に関する鹿児島県との取り組みや産学官連携の半導体人材育成のコンソーシアム協議会に関する説明があり、それらの活動に伴う今後の本センターの業務内容について報告があった。
- ・鹿児島工業高等専門学校をはじめとする他校との協定に関する報告があり、当該協定を通じてこれらの学校の卒業生が本学の修士課程・博士課程へ進学することによる人材確保の取り組みが進められていることの報告があった。

- ・先端研究・地域連携部門より、今年度の8つの研究会の説明と、各研究会への予算配分について報告があった。

3.2 部門会議

(1) 人材育成部門会議

本会議は、人材育成部門の各グループの活動内容を共有し実施事業等について審議・決定する会議である。参加者は、部門長、各グループ長、理工学研究科事務部長およびセンター職員である。審議内容は、本センター運営会議へ報告し、承認となる。令和7年度の実施状況を以下に示す。

○令和7年度第1回人材育成部門会議

令和7年6月27日（金） 13時00分～14時00分

(2) 先端研究・地域連携部門会議

本会議は、先端研究・地域連携部門の各領域の活動内容を共有し実施事業等について審議・決定する会議である。また各領域において研究会を設置している。研究会設置に伴い設立・継続が決定した研究会の配分費についても審議を行う。参加者は、部門長、各領域長、各研究会代表者、理工学研究科事務部長およびセンター職員である。審議内容は、本センター運営会議へ報告し、承認となる。令和7年度の実施状況を以下に示す。

○令和7年度第1回先端研究・地域連携部門会議

令和7年6月24日（火） 9時00分～9時30分

3.3 事務局定例会議

DXコネクセンターの特任専門員3名、事務補佐員1名および理工学研究事務部長の計5名で、DXコネクセンターの運営を円滑に行うことを目的として、週1回開催している。今年度の実績は計48回であった。内容は、主にセンター運営に係る行事の報告と今後の予定等であった。

3.4 コトづくり支援ラボ会議

当該会議は教育実習および加工依頼等の過月の実績状況報告と当月の予定確認、また、DX コネクトセンターコトづくり支援ラボの運営を円滑に行うための情報共有を行うことを主目的として、月1回開催している。会議のメンバーはコトづくり支援ラボ長（以下ラボ長と省略）、ことづくり支援ラボ技術職員3名、理工学研究科技術部技術長、DX コネクトセンター事務局職員、またオブザーバーとしてDX コネクトセンター先端研究・地域連携部門長（以下部門長と省略）にも参加いただいている。

令和7年度の開催日時と会議内容を以下に示す。

- 令和7年4月10日（木）9：00～ 参加者 ラボ長、技術職員3名、技術長、事務局員、部門長
 - ・工場実習等の授業支援、安全講習・利用申請および加工依頼状況について（※）
 - ※ 月例の報告事項につき、以降本項目は「定例報告」と省略
 - ・工場設備利用状況報告（1～3月）
 - ・令和6年度教育部門活動まとめ報告
 - ・令和6年度加工依頼作業時間まとめ報告
 - ・令和7年度コトづくり支援ラボ利用説明会について
 - ・教育学部開講授業に係るコトづくり支援ラボ見学の施設利用申請について
 - ・令和6年度コトづくり支援ラボ決算、令和7年度コトづくり支援ラボ予算案報告

- 令和7年5月8日（木）9：00～ 参加者 ラボ長、技術職員3名、技術長、事務局員、部門長
 - ・定例報告
 - ・機械工PG授業利用に係る施設利用申請について

- 令和7年6月5日（木）9：00～ 参加者 ラボ長、技術職員3名、技術長、事務局員、部門長
 - ・定例報告
 - ・理工技術部公開講座および建築学科授業利用に係る施設利用申請について

- 令和7年7月10日（木）9：00～ 参加者 ラボ長、技術職員3名、技術長、事務局員、部門長
 - ・定例報告
 - ・設備利用状況報告（4～6月）

- 令和7年8月7日（木）9：00～ 参加者 ラボ長、技術職員3名、技術長、事務局員、部門長
 - ・定例報告
 - ・イベントにおける施設利用制限について
 - ・第1四半期受託作業料報告

- 令和7年9月11日（木）9：00～ 参加者 ラボ長、技術職員3名、技術長、事務局員
 - ・ 定例報告

- 令和7年10月9日（木）9：00～ 参加者 ラボ長、技術職員3名、技術長、事務局員、部門長
 - ・ 定例報告
 - ・ 工場設備利用状況報告（7～9月）

- 令和7年11月6日（木）9：00～ 参加者 ラボ長、技術職員3名、技術長、事務局員、部門長
 - ・ 定例報告
 - ・ 第2四半期および工学系外上半期 受託作業料報告

- 令和7年12月4日（木）9：00～ 参加者 ラボ長、技術職員3名、技術長、事務局員
 - ・ 定例報告

- 令和8年1月15日（木）9：00～ 参加者 ラボ長、技術職員3名、技術長、事務局員、部門長
 - ・ 定例報告
 - ・ 工場設備利用状況報告（10～12月）
 - ・ 第3四半期受託作業料報告
 - ・ 令和7年度加工依頼の締め日について

- 令和8年2月5日（木）9：00～ 参加者 ラボ長、技術職員3名、技術長、事務局員、部門長
 - ・ 定例報告
 - ・ 令和7年度 機械工作実習説明会実施日程について
 - ・ コトづくり支援ラボ事業実施報告書について

- 令和8年3月5日（木）9：00～ 参加者 ラボ長、技術職員3名、技術長、事務局員、部門長
 - ・ 定例報告
 - ・ 第4四半期および工学系外下半期 受託作業料報告

鹿児島大学大学院理工学研究科
附属 DX コネクトセンター
令和 7 年度 事業実施報告書

発行日 2026 年 3 月

発行者 DX コネクトセンター
〒890-0065 鹿児島市郡元町 1-21-40
TEL : 099-285-7689

WEB : <https://dxcc.eng.kagoshima-u.ac.jp/>

※本書の内容の無断転載・複製を禁じます。